始

144

290.9
I.75

行旅

石井柏亭著

976
152

自序

斯う云ふ時局下でなくとも私達の旅は決して單なる遊山ではなかつた。其多くは畫の製作を目的とするものであるが、時には地方の展覽會の審査を賴まれたり、講演や講習などの用務を帶びたりするのであつた。私の足跡は日本内地の大半にわたり、又朝鮮滿洲から中北支にも及んで居る。こゝには其等の旅に際しての紀行文を新舊取り交ぜて蒐錄した。

私の紀行文は私の風景畫と同樣に客觀的に平淡なることを免れまい、併し日本の自然の僞りなき叙述が國土愛の增進に幾分なりとも寄與する處があれば幸である

私はなほこれに添ふるに僅かの海外所感と雜多な隨筆とを以てした讀者は其等のなかにも聊か私自身の平生の主張を汲まれ得る筈である。

昭和十八年晩春

眉安居に於て

著者識

―目　次―

大陸の風物

養老から塘沽へ……三
張　家　口……一〇
張北と大同……二一
北京圖史……三〇
北京雜記……三九
北京の芝居……四一
蘇　州……四九
南滿雜觀……五六

南鮮……六六
朝鮮雜記……七四
承德……七九

旅の思ひ出

三日の旅……八九
水郷……九五
武州御嶽……一〇〇
江村晩春……一〇五
伊豆の春……一〇八
雲仙と高千穂……一一四
南日向の海邊……一二一

日の影……一二四
吾妻小富士……一二八
冬の中禪寺……一三一
湯の湖……一三六
美保の關……一四〇
私の知る峽谷……一四四
阿波吉野川……一五〇
銚子の旅……一五三
富士百景……一五九
造艦碑……一六八
大島……一七三
春の近江路……一八〇

大阪回顧……一八七
富士箱根……一九一
埼玉ところ〴〵……一九六
那須……一〇一
東北の初夏……一〇五
佐渡……一〇八
京洛三景……一一一
最上川……一一〇

歐洲の旅

英國に關して……一一七
歐洲公園雜觀……一二四

ミストラル……一三七
マラガ……一四一
北歐の思ひ出……一四六
印度支那の話……一五一
眼……一六〇
ブルジエを讀む……一六五

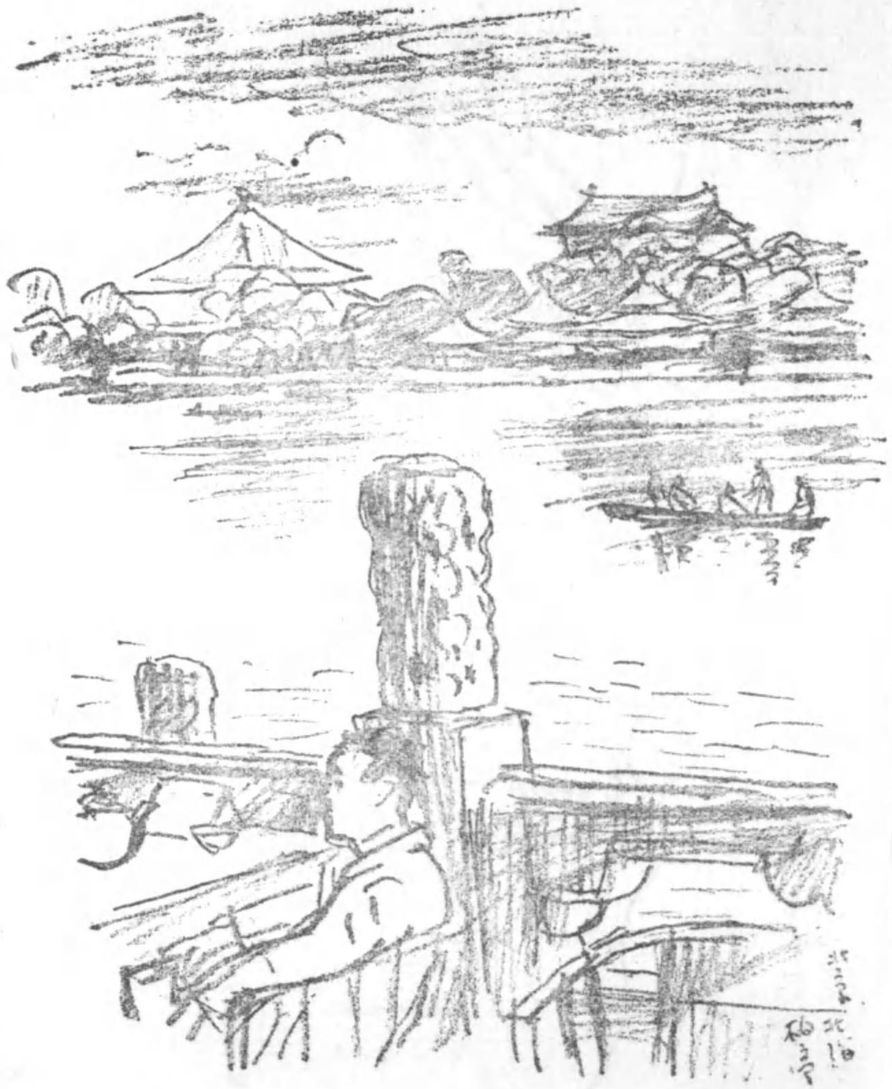
東京雜話

環境の美醜……一七五
愛市心……一七八
外濠……一八一
ポスター稅……一八五

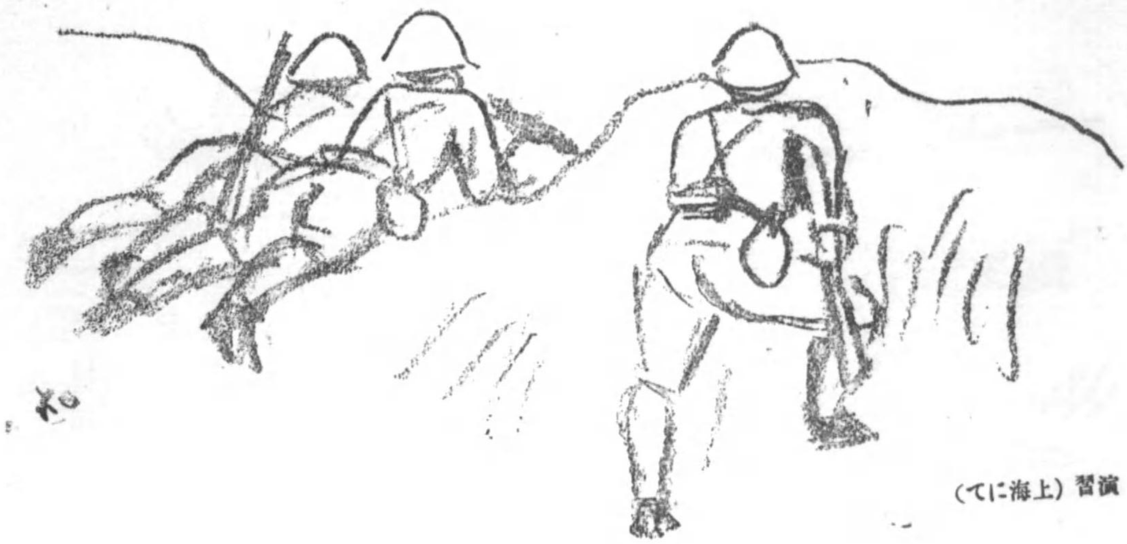
自由と束縛……二八八
美術季漫談……二九一
晩春の一日……二九七
一日……三〇一
旅館……三〇八
溫泉……三一三
近頃見た映畫……三一七
廣重と五十三次……三二三
繪雙六……三三〇

圖版

蒙疆（卷頭原色版）・北京・北海・演習（上海にて）
蘇州城外・千山・熱河離宮・伊豆の海・日の影・
鹽原渓流・外房・琵琶湖・琵琶湖畔・阿部隈川・
アヴィニヨン・瑞典風景・神田川・別所溫泉



北京北海



演習（上海にて）

外城用雖

土屋氏
時雨河畔

伊豆の海

Hall.

影の月

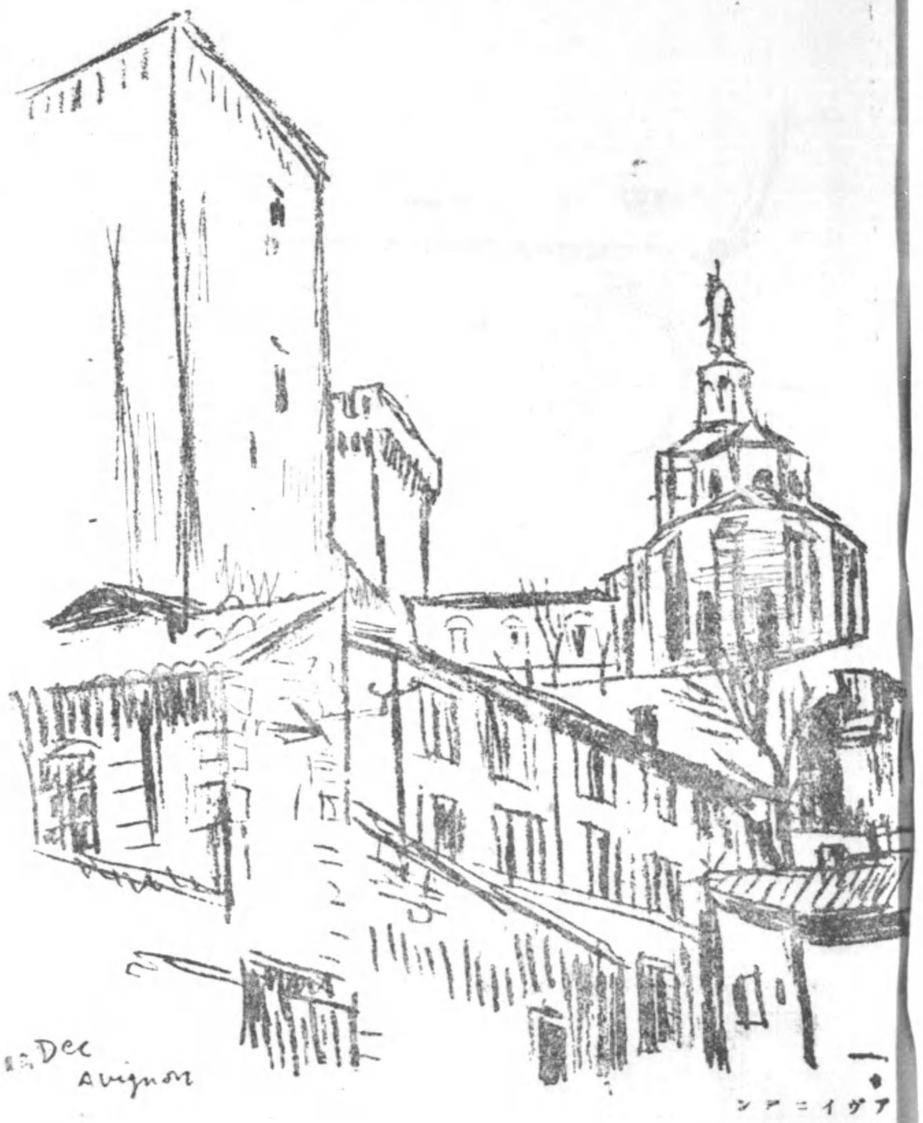
群山溪流 小谷

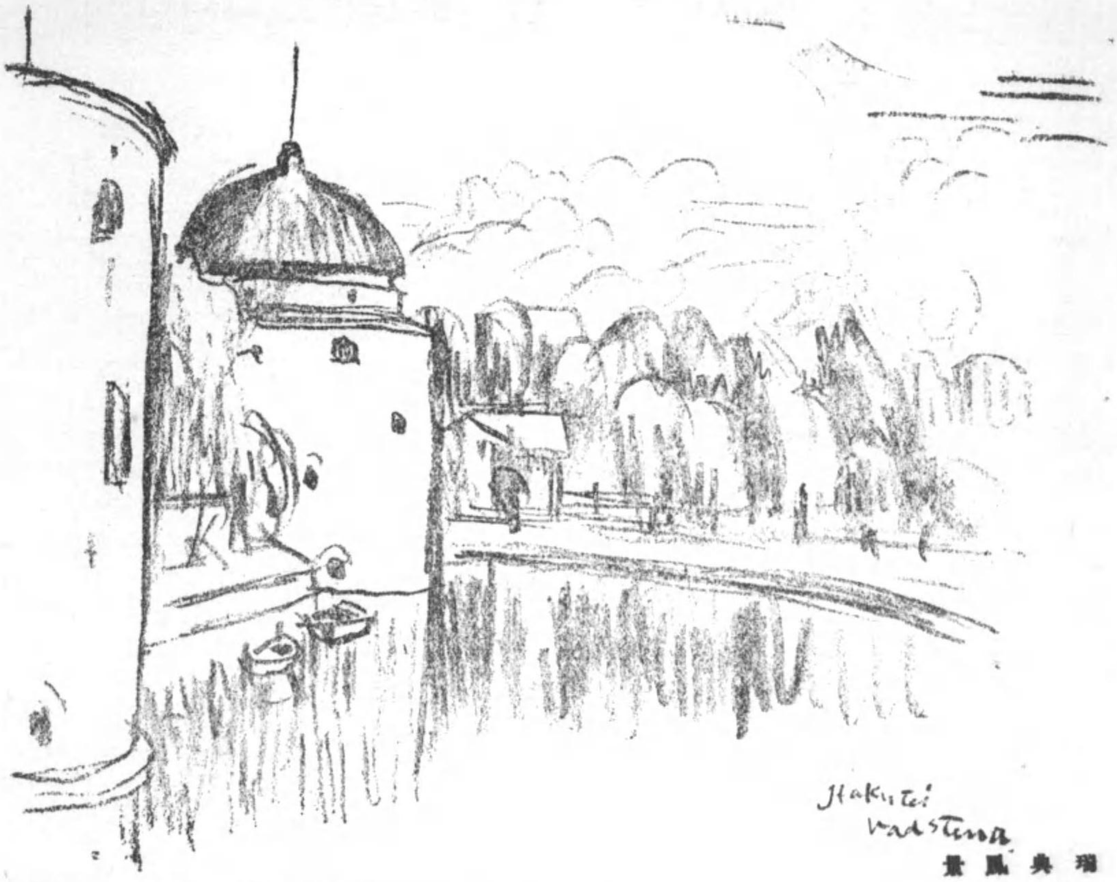
Malczewski
母 外

例 題 解

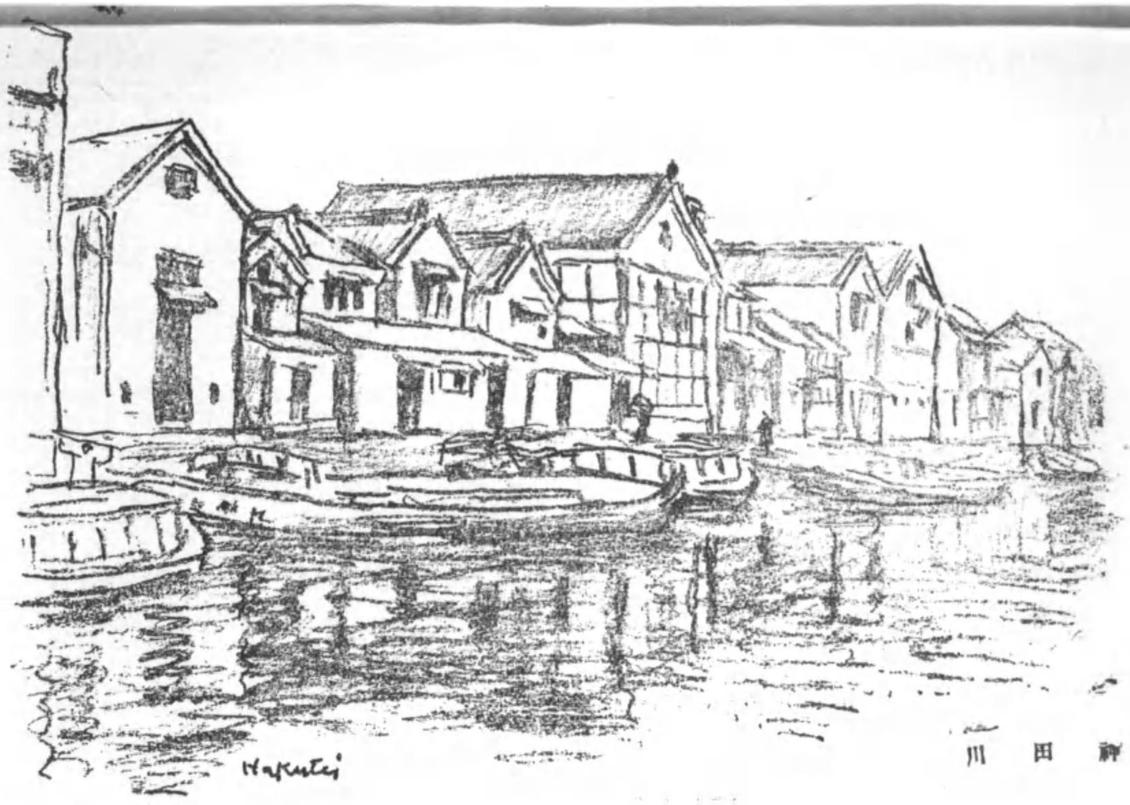
琵琶湖畔

川 陝 武 同


Dec
Avignon
シアニイヴア



瑞典風景


Hakutei
川田画

別所温泉

大陸の風物

養老から塘沽へ

夜行で大垣へ朝早く着いた。さうして驛前からタクシを雇つてすぐに養老へ行く。養老へは先に一度數代前の知事に案内されて其の瀧を見に行つたことがある。其時も菊水に憩んだことを覺えて居たので、今度も其處に午食と定めて、自動車の終點から電話をかけて其宿の男に迎へに來て貰つた。

休む間もなく瀧へ行つて『だいき』表紙繪の爲めに六號の油畫をすぐ描くことにした。既に勝手を知つて居る私は、瀧壺の處が物にならぬことを思つて、それから少し下つた、水が石の間を曲折して落ちるのを前景にした一圖を選んだ。時々日が漏れて崖の一部を照したりしても、其朝は大體雲が多く、惡く照らないので却つて都合がよかつた。描いて居ちうちに傍へ來て挨拶された人がある。それは大垣の學校の先生で家族づれで遊びに來ら

れたのであつた。學生の一團が毎日のやうに上つて來ると宿のものが話して居たが、なる程仲々賑かである。見物の一人は瀧の水かさが少いと云つて居たが、實際さうらしく見える。

菊水のそばの清水はいつ見てもよく澄んで居る。

其むかし孝子の汲みし清水
いま酒とならねど甘くもあるかな

とは前に來た時の私の駄詠であつた。

菊水の部屋には久保天隨の額と軸とが懸つて居た。部屋の外には杉の大木が茂り、蟬が喧しかつた。

二時の大垣發下りに間に合つた私は五時二十分に大阪驛へ着いた。『そごう』のH氏、美交社のM氏に迎へられて南のみやけで夕食を共にした。可なりに暑い晩でみやけの座敷には氷が置かれたりした。其處へ吉村のK氏にも來て貰つて、此間の水害のことや、畫の

賣行のことや、畫の材料のこと、それからそれと話が續くうちに出發の時間が迫り、大阪驛へ自動車を乘り着けた時、下の關行急行の出るに餘り餘裕がなかつた。改札の處で弟と姪とには辛うじて會ふことが出來たが、出征者以外の見送人はプラツトフォームに入ることが禁じられて居るので、別のプラツトフォームから私を見送らうとされた義兄にはつひに會ふことが出來なかつた。二個の小さな手荷物を私自身兩手にして、H、K、Mの諸君と碌々挨拶する暇もなく、手近の三等車に飛乘るやうな慌てかたであつた。

出征者を送る萬歳のどよめきのなかを動き出す列車内の人込みを押し分けて漸く寢臺車にたどり着き、東京から直行した同行、硲君の姿を其處に見出した。

九時四十分大阪發の西行は廣島へ行くにはあまり都合のよい列車ではなかつたが、他の急行車の寢臺券が一二日前既に無かつたので止むを得ないのであつた。朝三時に廣島に着く。どうにも仕樣がないから驛前の岩友旅館にしばらく身を横へることにした。此家も部隊の宿となつて居り、玄關には衞兵の或者が起き、或者は臥して居るのが見え、銃が立てかけてある。廣島へ來るともう軍國氣分が溢れて居ることを感じる。

起きて陸軍の運輸部に電話したら、乘船は午後だが一度打合せに來て呉れと云はれ、硲君と二人して宇品港へ行く。沿道には今日出發する部隊を見送るべく道ばたに坐つたりして待つて居る人々がある。運輸部の門を入つて便乘係に會つて打合せをした。荷物が相當あると云ふと、防護上困るやうなことを云はれたが、兎に角自動車を乘り入れることを許して貰ふ。

電車に乘つて歸る途次、國泰寺の渡邊產院の前を過ぎたので一寸下車して夫人に會ふ。產院の立關側に天幕を張つて、產婆會の人々が出張つて居る。宿から取つて來た荷物を產院へ運び入れ、院長に伴はれて別院の見える川岸の船料理『うきよ』で川魚を饗された。其處は涼しく景色がよくて軍國らしくない靜かさである。

七月三十日午後二時ランチによつて乘船する。同じ便乘者のなかに陸軍教授T氏の軍屬姿を出したが、氏は中支へ行くので、私達の船とは別である。私達の便乘する御用船は近海郵船の千歳丸が病院船と姿を變へたものである。小雨のぱらつく中を紺服の看護婦達が甲板に立列んでリレー式にはしけから公私の荷物を運び入れて居るのに朗かさの見えるこ

とは私を悅ばせた。しばらくすると彼等はみな白衣に着替へて各の荷物の整理などをして居る。傷病の將兵を乘せた片道が忙しく、片道は空が出來るわけである。

軍需品の荷役が濟んだあとで部隊を乘せる順序になるので、船が宇品を出たのは五時頃にもなつた。將校十二名と云ふ札がかゝつて居る一等室の一つが私達の室に充てられた。一等食堂が看護婦の室になつて居るので、食堂に使はれて居る娯樂室が狹いからと、私達の食事は室でするやうに取扱はれた。

あくる朝門司に着いた。曇つて風も强く天氣はあまりよい方ではない。こゝから便乘者がまた幾人か增えた。石炭の荷役が仲々手間どつて出帆は夕方近くになつた。小さなざるをリレー式にして運び込むやり方は、九州獨特のものであると云ふが、事務長の語る處によると、機械などを用ひるよりも結局此方が早いと云ふ。

玄海を通る時少しは搖れもしたが、風の向がよかつたかして大したこともなかつた。

あくる八月一日の朝、朝鮮の多島海を過ぎる時は既に天氣もよくなつて島々が美しく眺められた。看護婦は甲板へ出て物を編んだりして居る。中には日露戰役にも出たと云ふ故

参者がある。病院船も事變のはじめ頃は隨分ひどい負傷者を乘せたことがある。傷口からうじが湧いて居るのさへあつたが、今日はさう云ふひどいのは少くなつたと事務長の話である。

女性の手による看護が傷病者にとつてどれ位慰安になるか分らぬと云ふ。船に乘る時蒼ざめて居たものが、日本に上陸する際は見違へる樣に元氣を恢復して居るのもあると聞いて、さもあらうと思ふ。

乘つて居る特務兵達も甲板に横はつて雜誌を讀んだり、又種々な遊びに興じたりして居る。上陸後の行先は區々になるらしい。

二日山東半島の東端、威海衞、次いで芝罘を左に眺めて渤海灣に入つたが、直接目擊すると、山東半島と云つても仲々大きいものであることが意識された。威海衞には英國の軍艦が居た。

翌三日の朝太沽(タークー)のアンカレージへ着いたが朝の滿潮に間に合はないから夕方のを待たねばならぬと云ふことになつた。水深十四五尺なければ本船が白河を遡ることが出來ないと

云ふ。實に厄介な港である。其邊の海は白河から推し流される泥で黃土色をなして居る。淺渫船が淺くなる水路を絕へず渫つては居るが、徹底的の方法ではない。

乘組員は其暇を利用してボートを下ろす練習をやつた。看護婦や醫員達も皆救命袋を胴にくゝりつけて其練習に加はつたが、仲々手つ取り早く行かない。

扨晩の上げ潮になつたが、結局本船は入れないからランチを寄越すと云ふので、それを待つたが仲々到着しない。

十時頃になつて漸くそれが來たが、荷役を濟ませた上で私達がランチに移つたのは三時近くになつた。

すぐに秦皇島へ廻航すると云ふ千歲丸の暗い甲板には乘組の人達が列んで私達に手を振つた。ほの白く見える看護婦達も達摩船に戰つた兵士達に旗を振つて別れを告げた。

張家口

八月四日の夜北京に着いて碌々其都を見物する暇もなく、七日の朝七時正陽門を出る列車中に身を置いて張家口に向つた。憲兵部へ提出す可き畫を其地で描かうとしてゞある。

改札口で到着者の手荷物を檢めたりして居る爲めに、私達も荷物を托した赤帽も容易にプラットフォームへ入ることが出來ず、迫る發車時間に私達を焦々させた。一臺しかない二等車は相當に込んで、家族づれの日支人二組と坐を占めるそのコンパートメントは相當に窮屈であつた。其列車には頭等（一等）がついて居なかたつたが、面白いことに支那では頭等が赤で二等が白になつて居る。

南口へ來ると山が近づいて景色がよくなる。それから名高い、居庸關によつて八達嶺を越す驛であるが、宋代の彫りものゝ附いた關門其のものは汽車からは見えない。八達嶺の

長城を見るには青龍橋と云ふ驛で下車して四十分程の道を登るのであると云ふ。此邊の諸驛は去る五月の末に匪賊の襲ふ處となつて驛を守備するものに相當犧牲も出たと聞いて居る。車站のほとりに防禦が新たに造られたりして、現に工事中のものもあり、仲々物々しい。無論列車其のものにも警備兵が乘り込んで居る。

匂配が急になつて車の歩みは遲い。急行車でなく驛の一々に停つて行くので、北京張家口間は七時間足らずかゝる。長城を越えてしばらくすると多少遠ざかるやうになる山と山との間の高原を走る。八達嶺あたりも草山だが、先へ行くと餘計に石つぼい灰色の山が眺められる。懷來、宣化等の諸驛を經る。宣化は城壁に圍まれた相當の大さの市であるが、城壁に遮られてなかの家は一つも見えない。其近くの炭坑の爲めに重要な市となつて居る。

張家口へ着いたのは十三時五十分、兵站司令部の指定によつて日本旅館と云ふのを宿と定めた。驛からさう離れて居ない。私達の室に充てられた新館の一室は此家最上のもので寺内閣下も此處に泊られたと聞く。

兵站司令部で偶然今村大佐に出會ふ。大佐は今東京立正大學の配屬將校であるが、學校

の休暇を利用して見物に來られたのである。それで夕方近く大佐と同車して此市の北端大境門外まで行つた。其處は昔蒙古との間に物々交換の行はれた處である。それで大佐も私も其處で慌しい小品の卽寫を試みたが、私のは西溝の對岸高みに沿ふて立つ家々と河原に日除けを張る市場の群集とを收めた。西溝と云ふのは其近くで清河に合流するのであるが、平常水は至つて少く、人馬は其河原を通路にして居る。私は其處から上の方を眺めた一圖を六十號大に描くことに決めた。

夕方の時間は馬鹿に長く、八時半位まで明るい。これでも既に大分縮つたのだと云ふ。さうして北京に比べると大分涼しい。北支の輕井澤などゝ呼ばれても居る。日射しは强いが汗の出ることが少いから樂である。

大境門外西溝の畫は、着いた翌日其構圖を定めてから、十六日の午後概ぼ落成に至る迄七日を費した。張家口には十泊したわけであるが、間に天氣の惡い日があり、又軍の人々に誘はれて張北へ行つたりしたので多少豫定に狂ひを生じた。七月から八月へかけては雨季と云ふことになつて居るが、もう既にそれを過ぎたらしい。尤も雨季と云つても內地の

それとは全然趣が變つて、決してじめ〳〵したものではない。驟雨がかゝる程度のものである。氣象の豫報と云ふものがないので、其日の天氣を卜することが六かしい。土地の在住者もたゞこゝの天氣は分らぬと云つて居るばかりで一向頼りにならない。朝馬鹿によく晴れて居ると思つて喜んで居ると、午後急に雲が多くなり、或は夕立が來たりしてまた忽ち日が照ると云ふやうな、端睨す可からざる行方である。

大きな畫を現場で畫くのに毎日それを持ち運んで居ては困るのであるが、幸ひ私の選んだ場所のすぐそばが、岳王廟であり、それに崇禮縣の指導官大坪氏が家族と共に住んで居るので、其處へ畫を預つて貰ふことにして萬事都合よく運んだ。外の市でもさうかと思ふが、張家口には廟の多くが住宅になつたり警察署に充てられたりして居る例が少くない。

圖の右手には蛤蟆山と云ふ突几たる石山が聳えて其麓に西溝北大街の家々、殆ど黃土一色の壁が段をなして重なつて居る。こゝに限らず北支の民家は一般にさうであるが、壁でも屋根でも皆土を幾重にも塗り重ねたもので、屋根に草が一ぱいに生へて居るのも珍しくない。多分楊樹であらうと思ふ一本の大木が圖を引しめて居る。左手の山は長城を載せて

居る、その裾だけが入つて居り、其岸にも河に沿ふて家並がある。知つて居る人が見ると兩岸の間遠く見える山の彼方に、蒙古へ續く大高原が想像される事と思ふ。蒙古から出て來る人馬はみな河原を傳はつて來る。今は全く其巻を見せないが、駱駝の群が多近くなるとこゝへ出て來ると云ふ。夏は駱駝の背の瘤が低くなるし、また毛を刈られて居るので荷物の運搬に適さないさうである。

前景は廟前の小さな廣場でそれは胸壁で劃られて居る。私は事變色を添える爲めに司令部に乞ふて兵をモデルに其處に一人の歩哨を點じた。其地點には警官も立つて居たりするので歩哨の居ることは不自然ではない。廟前を過ぎつて一段降りたところに井戸があり、石油罐一荷の水を汲むものがよく私の傍を通る。水は濁つては居ないが矢張其まゝ飲むには適さない。

張家口は清河に沿ふて南北に細長い市であるが、川の東岸最南端に軍司令官の官邸がある。それは鐘紡の建物であつたが、事變前支那側で其すぐ前に銃口を備へた嚴めしい石門を建てた。それは日本を威嚇する意味であつたらしいが、馬鹿なことをしたものである。

今それは官邸の前門となつて其上に歩哨が立つて居る。張家口を去る前一夕司令官、參謀長から晩餐を饗された。涼しい官邸の露臺上で事變には緣の薄い東京の回顧談などをしたことである。それから鐵道線路に沿ふて日本をはじめ各國の領事館があり、尙北すれば驛になる。此附近に司令部や兵站司令部其他滿鐵關係の諸施設があり、清河に架けられた清河橋へ行く東安斜街の西側は亭樂地帶で、其處に劇場や料理屋靑樓等がある。其劇場には此間奇術師天華の一座がかゝつて居た。

支那料理も其邊にあるのが一流らしく、私は其一軒萬福春と云ふのへ、二度ばかり行つた。日本語の出來るボーイが居ると云ふ程でもないが日本譯の菜單を具へては居る。

私の宿は驛を出て東へ入つた所にあるが、其邊は日本人が多い。すぐ隣りにオペラと云ふカフエーがあり、また本願寺がある。慰靈祭なども其處で行はれるらしいが、此本願寺樣は多分假ではあらうがあまりに貧弱を極めて居る。

清河と云ふ名に背いて此河の水も矢張泥々に濁つて居る、雨が多ければ水量が一時に增えて恐ろしい勢で逆まくが、又其引くことも早い。兎に角內地のやうな砂河原でなく泥河

原であるから、餘程乾燥した雨のない時季は又別であらうが、私の見た間は河原の泥も濕つて居た。

鐵橋は綠に塗つてあり、いつも自動車や洋車や行人でごた〳〵して居る。橋を渡つたところに料理屋が二三軒道をはさんで對ひ合つて居る、其一つ福興樓と云ふのゝ樓上から橋畔を瞰下ろす小品を畫いた。給仕の小娘が二人居て客席へ出て來る。一緒に行つた宿のボーターの語る處によると之等の小娘も客を取らされて居ると云ふ。歳はいくつかと訊いて見ると十六と十七であると云ふが、大きさからすれば十三四にしか見えない、相當にすれても居るやうである。同行硲君は其一人を室内に腰かけさせて描きかけたがうまく進行せずに中止してしまつた。飯屋だから仲々騷々しいだらうとは始めから推せられた。料理屋の店頭には采配のやうな酒ばやしが懸つて居るが、其色に赤いのと青いのとある、さうして其の青いのは回々教徒のであることを他から聞いたが、此福興樓も對ひ側のと同樣回教徒であることに氣附いた。回教の料理屋は豚を使はないと云ふ。支那では回教のことを「清眞」と云つて居る、店頭に其文字の明かにしてある店もある。

城内はそれに接じて居るが、城内にはこれと云ふ店はない。重なる商店は大抵城外に出居る。城は多少不規則な長方形をして居る。私達はよく其西門を入つてすぐ上の城壁に上つて、硲君は鼓樓南街を瞰下ろして畫き、私は東の方朝の光を逆に受けた山なみと城壁の東南隅奎樓と城内の或家々とを入れた一圖を作つた。城壁は外側が石や煉瓦で積まれて、内側は甚だ不規則な土壁になつて居る。

奎樓と云ふのは傍へ行つて見ると五角三重の塔で一寸變つたものである。無用の者入る可からずと云ふ樣なことは書いてあるが、それでも取締られて居るやうには見えず、隨分荒廢して居る。城壁附近には脫糞が夥しく、それに蠅がたかつて不潔を極めて居り、行つて見たいと思つても行き得ない場所がある。後藤朝太郎の如きは何でもかでも支那を賞めるが、少くとも北屋外の濫糞はまさか賞美されまい。店前に非常用水を具へさせたり水撒きをさせたりすることも察南自治政府になつてからの改善ではないかと察するが、共同便所を增設してこれを改めて欲しい。野外に「大德の糞たれおはす」のには風流氣もあらうが、人口の密なる市内では困る。

鼓樓は市の中心に近い四辻に跨る門の上にあり、それを北へ突當つた石磴の上には、これも城壁を利用して建てられた玉皇廟と云ふのがある。石段を上つても一向展望がきかないで、何とかならぬかと思つて居ると、丁度遊んで居た子供達が、要人來了(ヨウレンライラ)、開門來(カイメンライ)と云ふやうなことを怒鳴つて呉れたので、中から納所坊主が出て來て御堂の扉を明け鉦をたゝくから、少しばかり心づけをして、左右の城壁上露臺へ出して貰つた。面白い眺めでもあるが、同じ程度の黄土壁と黄土屋根とが一ぱいで、仲々取扱ひにくさうである。曾て西班牙へ行つた時支那に似て居ると思つたが、此處に在つてまた逆に西班牙を聯想した。たゞ西班牙の方には白壁が多いので引立ちがよい。こゝでは黄土の壁か、さもなくばもと〳〵灰色の煉瓦壁を青黒いペンキで塗つたのが多い。

城内には蒙彊銀行をはじめとして官私の公館が多く、三井とか森とか云ふ文字も見えて、日本人も可なり住んで居る。張家口の日本人は三千を越したと云ふ。西隅にある城隍廟の近くで浴衣着の妻君がトラツクで來た兵隊をねぎらふ可く西瓜を出して居り、兵士は「イヤこれぢや御剿走になりに來たやうで」と恐縮するなど日本的風景を現出して居る。既に

或家の扉の上には白墨を以てした「バカヤル」(馬鹿野郎をなまつた)の樂書さへ見られた。支那の古い民家なり廟なり、皆美術的見地から堅固にも立派にも出來て居るのだが、今の支那人は其價値を忘れて居るかも知れない。併しこれは日本の舊物に對する日本人の場合でも同じであるから必ずしも支那を責める譯には行かぬ。交通衛生其他の近代的諸施設の改善と同時に、いゝ指導者を送つて斯う云ふ古建造物保護にも日本の力を貸さねばならぬことを痛感する。

城をはづれる處から片側に並木のある南大街と云ふ幅の廣い埃つぽい道があり、それを尙北すると察南自治政府が右側にある。「日察如一」「剿除共黨」「民族協和」「民生向上」の標語が其壁に大きく書かれて居る。察南自治政府に近く左側に迫る石山の上に亭がある張北街道の方に其登り口があるさうだが、登つては見なかつた。其同じ石山の麓に地藏寺と云ふ寺があり、一寸眺望がよい。立つて鉛筆畫を描いて居たら、不要と云ふにも拘はらず、寺の者等が椅子と卓とを持出して來た。必ずしも錢を欲しがるわけでなく、親切氣もあるやうに見える。

尙少し先きを今一段高く登つたところに西大平山と書いてあり、景觀を兼ねての寺がある。其處の胸壁沿ひにもう花も末がたの立葵やまだ黃化しない雁來紅があり、紺靑の朝日の日高くして尙しぼまぬのがあつた。私の感心したのは石など凸凹した此山をよく纏足の女が御詣りに來ると云ふことであつた。大境門の少しく手前に牌樓があつて南面に「皇路淸夷」北面に「邊關重鎭」の文字が讀まれる。其邊には絨氈屋だとか何とか、蒙古字の看板を出したのもあつて自から蒙古色を帶びて居る。

牌樓から右折した處に小さな城郭があるが、其なかに住むものは少く廢墟のやうになつて居る。場所が偏して居る爲めに段々人が住まぬやうになつて南方の城內附近に移つたとも聞いたが、丁度其中央關帝廟に面した市閭大街の廣場で警察學校の生徒に兵式訓練を施して居た一日本兵の語る處によると、事變の時はこゝへ隨分避難者があり、日本軍の爆擊を受けて破壞されたと云つたが、私の見る處では其廢墟的趣をなして居るのは最近のものとは思はれない、其大街に面して亞米利加の毛皮商の堂々たる店もあつたが、それも空つぽになつて居り、其隣りの廢屋は壞されつゝあつた。

靜寂を破つて驅け足、臥せ、前へ進めつ、折敷けつ等の號令が響くなかを、私は關帝廟に上つて東西から下つて來る處の外長城の望樓と、あまり丈夫でない城壁と大境門とを眺めて居た。飛行機が一臺長城をかすめて蒙古の方へ向つた。

張北と大同

〇〇兵團の副官部から電話があつて、張北へ行く軍主腦部に同行されぬかと言はれ、又なき機會と思つてこれを受けた。綏遠包頭の旅から歸られた今村大佐も一緒に行かれるので尙更都合がよかつた。軍主腦部の人々の乘つた車が二臺、それに私と今村大佐との乘つたのが次ぎ、其あとから兵十數名を載せたトラックが續いた。

それは八月十二日、よく晴れた朝であつた。一行は私の畫をかきかけて居た大境門の方へ行かずに、其手前を左折して、平門と云ふ新らしい門をくゞり、所々道がいたんだり橋

が壊れたりして居る爲めに道でない河原を通る時、車はひどく搖れた。

しばらくにして萬全縣に着くと其城門に蒙古軍が整列して喇叭を吹いて一行を迎へた。蒙古兵は青白赤（はつきりしないがそんな風に見えた）の色の褪めた腕章を卷いて居る。蒙古車と云つてもこゝらに居るのはみな漢人である。日本軍と一緒に戰ふ時などはいゝとしても、平素少し八釜しい訓練でもすると脫走したりしてあまり賴みにならぬらしい。

軍の人々の甩向とは沒交渉に、私は縣城内の民家の群に日本國旗の揭げられたのなどを卽寫して居ると、もう出發と急き立てられた。こゝらの民家は殆ど黃土一色と云つてもよい。其黃土と青空、そこへ日章旗が揭げられるとよく引立つ。張家口は萬全縣に屬して居る譯だが、無論萬全縣城の大きさは張家口の比でない。

それから間もなく長城線に達し、道路からあまり遠くない高みに殘る支那軍のトーチカの一つに入つて見た。一體トーチカと云ふ露語は英語のポイントに均しく、單に點と云ふ意味に過ぎないのださうで、トーチカには堅固のもの粗末なものもある譯である。さうすると近頃の「トーチカ心臟」等の造語は可笑しなことになる。其トーチカの中には七八人

位入れる。

長城と云つても其附近の外長城は實に簡單なもので、たゞ胸壁のやうに石を積重ねたに過ぎず、私達は容易にそれを跨いで越えた、相當强く吹く風に、山に咲く八千草は靡いた。草花にはをとこへし、野大根、われもこうなどがあり、特に野大根の紫色は綺麗であつた。

それからは平な高原を一とすじに張北へ向けて走つた。途次阿片をとる爲めに罌粟を植ゑて居る處を過ぎる。花の白いのでないといけないのださうであるが、白くないのも交つて咲き、其處に働く農人も幾人か見た。民家の眼に觸れるのは寥々たるものだが、野はよく耕されて居る。寧ろ何も作られて居ない所は少い。

張北に着いたが、萬全とは違つて城門に兵の整列はなかつた。公署に憩んで午食を攝つたが、給仕に出たホテルの姐さん達は頗る物凄いものであつた。こゝでも軍の人々と分れて、私は城門を出たところの蔭に立ちながら、生刻通つて來た一と筋の路を逆に眺めた一小品を得た。寂しいやうではあるが、それでも畫いて居る間は、驢馬に乘つたり荷を着

けたり、或はとぼ〳〵と歩いて來る人々が幾組か城門を入つた。略のところ〳〵に出來た水溜りには青空を映して居る。其青空には明暗のはつきりした雲が遠近をなして、中天から地平に及んで居る。私の畫は寧ろ其雲に興味をもつて畫いたものである。

こゝらへ來てもまだ蒙古らしい趣は見えない。私は張北の公署に近く標本として移されて居る包の一つを覗いて、僅かに蒙古の生活の一端に觸れたに過ぎない。本當の蒙古らしいものを見るにはもつとずつと北せねばならぬ。

軍の人々と分れて、今村大佐と私とは長城線を越へた、丁度一年前に皇軍の苦戰したと云ふ所に坐を占めて、砲壘のやうなもの〻點々と殘る山の嶺を寫して居た。內蒙方面からの我が軍が長城線を占據したのが去年の八月二十一日、萬全を占據したのが翌二十二日、それから二十七日張家口に入城する迄に此邊で激戰があつたのであらう。私が寫生帳に鉛筆畫一枚を描く間に大佐はシカチーフを用ひて早くも三號の油畫をものした。敏速驚く可きものである。

私は碌君と共に十七日夕方張家口を出る列車で大同に向つた。さうしたら偶然同じ車の

なかに和田香苗君を見出した。和田君も陸軍の囑託として大同から綏遠包頭までを志すのであつた。和田君は軍屬の服を被て居る。私達もさう云ふ扮裝をしてよいのであつたが、其物々しさを避けて普通の服にした。大同へ着いたのは十一時過ぎであつたが、〇〇兵團の方から聯絡して與れた爲めに〇〇部隊から自動車が廻されて居た。驛と大同の市とは可なり離れて居るので、自動車がないと困る處であつた。和田氏のは前以て通じてなかつたが、私等と一緒に晉北ホテルと云ふのへ泊ることになつた。暗いのでよく分らないが、市へ入る時城門を幾つも潜つたことだけは分つた。

晉北ホテルはもと支那側で旅館兼倶樂部のやうにして居たのを日本人の經營に委したのだと云ふが、各室は寢臺等の家具を置いて洋式になつて居る。私の室はバス附きで上等の譯だが、ベルが壞れたり水洗便器の水が出なかつたりして充分とは云へなかつた。

あくる日早速〇〇部隊へ行つて鈴木副官に又後宮中將に會つた。外でもさうだが、こゝでも〇〇部隊を平假名で〇〇〇〇ぶたいと書いた札が其司令部の入口に懸つて居る。支那人に讀まれにくい爲めに斯うしてあると云ふことである。

軍から自動車を出して貰つて三人一緒に名高い石窟寺に向ふ。西門を出て川沿ひの砂つぽい路を行くのであるが、川の水が意外に澄んで居る。こんなことは珍らしいと同乗の兵が云ふ。討伐の歸りでゞもあるか、數臺のトラックに乘つた鐵兜の兵士達の歸つて來るのに出會ふ。

石窟は大同府の西北三十里の武州塞山谷の北面に穿たれて居るのであるが、六町一里の支那里であるから、それは日本の五里にあたる。此石窟の所在は一時支那でも忘却されて居たのを、明治三十五六年頃伊東忠太博士が發見したのであると云ふ。大正四年大村西崖の「支那藝術史彫塑篇」に其寫眞の幾葉と解說とが載つて居り、次いで大正九年には木下杢太郎、木村莊八二氏がこれを探り、又同十年には中川忠順、新海竹太郎二氏がこゝに回遊して寫眞の多數を撮り、「雲崗石佛」の大著をなして居る。之等によつて大同の石佛は廣く日本の美術界考古學界に知れ渡るに至つた。

私達は石佛寺門前に着いてすぐに警備隊の本部へ行つて午食の用意を賴み、中央部の第五、第六、第七等の諸洞を見た。其第六洞の前に四層の石佛寺本堂（釋迦佛堂）があつて

其前堂をなして居り、隣れる東堂、阿彌陀佛洞が第五洞の前堂、同じく西堂が第七洞の前堂となつて居る。之等の諸洞は規模も大きく、窟に寄せ掛けて建てられた堂宇に保護されて保存がいゝ樣なものゝ、後から後から塗り替へられた彩色の爲めに彫刻の原態が分らぬやうになつて鑑賞には具合が惡い。塗り替へるにあたつて、もとの彩色を剝すことをしないで上へ上へと重ねたから彫刻の角が皆圓つこくなつて變なものになつて居る。又本尊などで時代の全く降るものが置かれて居るのもある。其邊を案内す可く小僧が附いて來たので、五錢ばかりやつたら、彼はそれを仲間に取られるのを恐れてゞあらう、佛像の或處へ隱して居るのを見た。

第八洞（佛籟洞）の門口横腹にある相當肉の高い浮彫はかねて寫眞やら杢太郎莊八兩君のスケツチなどによつて知つて居たが、極めて特色あるものである。鉾を執つて頭に鳥翼を附けた神王の上には三面八臂で牛背に乘る神があり、又それに對する他方には五面六臂で迦樓羅に駕する神像があり、婆羅門諸神の佛敎に混入して居る例と見ることが出來る。此部分は彩色が剝げて居るので尙更よいのであつた。

それから西へ九、十、十一、十二、十三と列ぶ諸洞の彫刻も皆彩色を施されて居る。川端龍子君が今度の青龍展に出して居るのは其十一洞で、たしか此中に太和七年と云ふ刻銘があり、それで北魏の年代が證される譯なのであつた。

十三洞で一旦中絶して十四洞から三十洞に至るのであるが、二十二洞の外崖大佛の邊まで〻其あとのものを割愛した。此邊は民家が石窟に接近し、洞の或ものは民家によつて藁の置場にされ、或は厩に充てられたりして散々なことになつて居る。鳩が其洞窟に巣くつて居るのは悪い感じではないが、これも弱い岩質の彫刻を損ずる役目をして居るかも知れない。

警備隊で兵士の攝るやうな麥飯と漬物の午食を饗された。牛鍋と云ふのが附いて居たから御馳走の方である。素人細工のやうな武骨な白木の膳も軍隊らしくて面白かつた。警備隊は支那側が病院に使つて居た處へ入つて居る。今は大した事件もないので石佛の番をして居るやうなものである。

食後二十二洞の外窟大佛を入れた一圖を卽寫したが、日射しが仲々強く、張家口で引込

んだ鼻風邪の爲めに筆執る間も鼻水の垂れるに困じ、つひに鼻孔を紙栓で塞いで描いた。和田君、硲君も其近所で畫いて居た。

此露出した大佛も他のものと同じく實はもと其前面が掩はれて戸口と明窓とが開いて居り、其處から仰がれたのであるが、其等がいつか壞れ落ちて全形を露出するに至つたのである。唇厚く鼻隆く目長く、頤豐かな顏をもつた其佛像は實際印度とも支那とも違ふ胡人的特性を具へて居る。曇曜と云ふ人が之等の石窟の制作に與つたと云ふが、無論之等の彫りものゝすべては工人の仕事である。所詮其頃の工人の仕事の水準が高かつたことを証するまでゞゝある。

私はなほ二十四洞に近い小洞B（中川氏の著による）の内側の浮彫を素描し、去つて東方第三洞の少し時代が降るらしい、觀音勢至を脇侍とする佛像を觀、警備隊の酒保で一本二十五錢の麥酒に喉をうるほした。

大同の城は殆ど方形に近く東西南北に門があり、其客門からの大路が交叉する中心の四辻に四牌樓がある處など、大體北京に則られて居るが、其四牌樓が堅固で而かも適度に古

びて居るのはよい。街には高い家が少く、一體に田舍びた古風な感じが漂つて居る。山西が美人の本場だと云ふが、街頭美人らしいものにも出會はなかつた。併し年若くして纏足して居るのを見ることは比較的多かつた。私は二重になつた西門の間で小さな油畫を描いた。眼のまへの泥濘を通つて背に石炭の塊を載せた驢馬などの頻りに過ぎるのを見た。面白いのは驢馬を先頭に、次ぎに馬と牛とを列べて其三頭で石炭の車を牽かせて居るのを見たことである。馬子は泥濘にかゝる時タララツタララツと云ふやうな懸聲をして其等の動物を勵ました。またこゝで私は幾頭の駱駝にも出會つた。駱駝はみな毛を刈られて生白い其皮膚をあらはして居る。それを見て自から唐代の俑が聯想されるのであつた。

北平圖史

北京の崇文門に近い德國飯店の屋上で麥酒を飲んだあと、不圖階下の壁に掲げられて居

る一枚の圖に眼を留めたが、それは古版畫のやうな貌をして居ながら、實は一九三六年フランク・ドーン（Frank Dokn）によつて著された新らしい圖であつて、「北平圖史」卽ち北京市の歷史と地理とを眼によつて早分りさせようと云ふ目的の出版である。其旅館でもそれを頒つと云ふので私も其一本を買つて來た。

併し私は此圖によつて旅行上の實益を受けるには至らなかつた。何故かと云ふに、八月の初北京に着いて二三日經つと、其暑さに堪へきれずに、すぐ張家口へ逃げ出し、歸りがけに十日ばかり滯在したに過ぎなかつたからである。さうして其十日をも全く中海と廣安門と中央公園との畫作に費した爲めに市中見物の餘暇がなく、僅に一日を割いて萬壽山と天壇とを訪れただけであつた。

圖中宮城の後門卽ち地安門の外には鼓樓鐘樓が可なり大きく畫かれて居る。民衆教育館と云ふものになつた其鼓樓のあたりは、什剎海を見かたぐ自由學園の生活學校と云ふものを參觀する時に通つた。場末の街ではあるが、もと滿洲族人の住居で居たと云ふやうな由緒のある所でもある。生活學校はたしか警官學校かなどのあとを借りたやうに聞いて居

る。廣々した敷地のなかに平家の幾棟かがゆつくり散在して居る。

什刹海は西海後海前海の三つに分れて居るが、それはみな續いて居り、なほ南下しては宮城内の北海中海南海にまで達して居る。此水は玉泉山から引かれて居ると云ふことである。鼓樓西大街を西北へ行つて所々に覗いた什刹海は、圖で見るやうに水がたつぷりしたものでなく、蓮や其他の水草の爲めに大部分隠れて居るのに失望した。

此池の縁に急須や茶碗が畫いてあるのは、夏日大衆向の茶店が此あたりに軒をつらねて居るのをあらはしたものであらう。前海を横ぎる堤防は可なり雑沓して、飲食物の異様な香が漂ふところに、日本の居合抜にも似た武術者が、肌ぬぎの偉大な身體に聲を張上げて剣を片手に頻りに武道を談じて居るが、周圍の群集をそれほど引つけて居るとも見えなかつた。

黄瓦の祠堂に近く水邊にある建物は醇王府を意味するものであらう。領事館の原田氏の介によつて私は王府一覽の便を得たが、其庭は可なりに荒れて草は茂り放題に茂り、流れに架けた橋の欄干も壊れたりして居る。築山の上には扇形の亭があつて、其處から池の方

が見える筈だが、今は充分の眺めがない。宮内の舞臺のあたりが留守をあづかる持原氏の住居になつて居るが、可なり變つた趣をなして居る。事變前幾度か支那軍に明け渡しを迫られながら、死を以て持原氏が頑張り通したと云ふことである。

宣統帝は實に此處で誕生されたと云ふが、「龍が生れた」(帝の御誕生)にも拘はらず親王が此御殿を去らなかつたことが帝を不運に導いたと云はれて居る。帝の誕生の御室其他の諸室を外側から覗いて廻れたが、構内に煙草が澤山植ゑてあるのは下人達が生活の資となると云ふ。

紫禁城にしても、私がざつと觀たのは故宮博物院の方だけで、彼武英殿などのある古物陳列所を見る暇はなかつた。博物院の幾つかの建物のなかに置かれて居る工藝品には殆ど碌なものがない。あんなものなら寧ろ何物も置かない方がよからうとさへ思はれた。宮城の建物も近づいて見ると外側の仕上げは粗末で、決して立派とは云へないが、規模の大さは流石に大陸的で、日本の及ばぬ所である。黄色に光る屋根瓦や中庭の敷瓦は雑草の生えるに任せてある。其處に廢墟の趣があつて、よいとも云へる。

中央公園又の名を中山公園と云ふのも、もと宮城の一部をなす社稷壇のあとであるが、革命以後種々な記念碑が立ち近代的設備も加へられた公園になつて、北京人が好みの遊歩場所となつて居る。私は其なかにある來今雨軒と云ふ洋食屋のテラースで或中國の令嬢を寫生した關係上、此公園へは幾度か足を運んだ。

其料理屋の傍の細長い低い建物で最近第一回の中日合同洋畫展覽會が催されたが、私は其模様をまのあたりにすることが出來なかつた。其料理屋は露西亞風のザクスカをたつぷり出したりして、却つて北京飯店などのきまり切つた料理よりも特色があり、中國人の顧客を多く持つて居る。特に其廣いテラースでの飲食は歐洲生活を知つて居るものにも親まれる。中央公園や北海などで出會ふ中國婦人の適度に近代化した風俗は、其すらりとした肢體と相待つて、中々優雅であると思つた。中國の婦女は日本製の布を使ひ、ハイ・ヒール洋靴を穿いても、決して不調和に見えない點が有利である。

圖中北海の所には其瓊島（白塔島とも云ふ）が喇嘛的白塔を以て殆ど覆はれ、北岸には五龍亭と快雪堂と九龍碑とが示されて居るが、畫を描くことを主とした私はいつも其中島

の周圍ばかり廻つて居て、下から仰ぎ見る其白塔に近寄ることもせず、また中島の北岸から渡船が出て居るにも拘はらず、五龍亭や九龍碑の方へ行つて見ようとしなかつた。併し九龍碑は多分大同に在るのと似たものであらうと、寫眞や他の畫によつて察して居る。矢張昔の建物を利用して居る、島の北岸の茶店に憩みながら、私は池水に映る五龍亭の美しい姿を畫にした。清朝時代からの雲龍の彫りもののあるテラースの欄杆に凭りながら麵を食べ茶を呑んで半日をうと〳〵暮して居る中國人には、戰爭のあることも知らぬげな泰平の民が思はれるのであつた。

水中亭の朱塗と荷葉の綠と楊樹の森とを、私は細長い中海の西岸ブールのあたりの小亭に日を除けながら畫いた。

南海の中心は光緒帝の幽閉されたと云ふ歴史のある島卽ち瀛臺であらうが、其處の諸建物をも茶店料理店が占領して居り、而かも決して旨いものを出しさうにも見えないので私は足を休めることをしなかつた。

自動車と洋車ばかりを利用して私は北京の電車を試みなかつたが、其電車の通つて居る

崇文門大街は古典的な北京のなかでは多少近代的に惡化され、殺風景になつて居る方である。私は其電車の停留所東單牌樓から一寸東へ入つた洋溢胡同の宿に泊つたり、それに近く並行する蘆線胡同に山中商會を見舞つたり、またそれよりも少し北した趙堂子胡同の鐘淵公館に客となつたりした關係上、其邊の地理は稍知つて居た譯である。此邊の屋敷町には日本人が多く住んで居る。そこには日本料理も幾軒かあるが、私は其重たい壁のうしろにどんな日本座敷が設けられて居るか、又どんな日本料理がどんな女達によつてサーヴィスされて居るかを經驗した。

内城の東北隅では崇文門大街の延長である東四北大街の軍司令部へ行つた位のもので、ドーンの圖史にある孔子廟や、喇嘛寺、露西亞教會なども知らなければ、東四牌樓よりも南にあるらしい犬寺や、西總布胡同にある李鴻章祠堂なども知らないのであつた。

たゞ銀座通のやうな趣をなして、外人向の店の軒を連ねる王府井大街（モリソン・ロード）で買物をしたり　東安市場のごた〳〵のなかを逍遙つたりしたに過ぎなかつた。後から思へば今はたゞ名だけ殘る燈市口とか西太后の生れた所と云ふ錫拉胡同などを通つて見

る位すればよかつた。

宮城の附近には、廣い並木路や、赤塗の壁、塀を以て圍まれた朱門の邸など、清朝華かなりし頃を想はせるものがあり、また草原を以てめぐらされた各國使館區域は西洋流に奇麗になつて居る。

内城の西部としては帝王廟と白塔寺とが圖に示されて居る外、名所は比較的少いらしいが、其方面へは全く足踏みをしなかつた。ドーンの圖には正陽門内國民黨本部が其青天白日旗の交叉によつて示されて居るが、それは云ふ迄もなく完全に消滅して居る。私はなほ醫生の張氏を訪ねる時、和平門内の北新華街と云ふ町を通つたが、其時美術學校の建設に奔走中の服部亮英氏と偶然にも洋車ですれ違つた。

外城の方は門前（正陽門）外の左右が盛り場になつて居て、圖史で見ても提灯街　寶石街、絹布街、眞鍮器街、銅器街、刺繍街、毛皮街、銀器街と、各の工藝の店が類を以て連つて居る。私は其寶石街をひやかし、絹布街で一寸した土産を買つたに過ぎず、瑠璃廠の骨董街をうろつくこともしなかつた。圖によると哈達門（崇文門）外に男が寶石類を手に

して顧客を呼ぶ所が描かれ、其處に盜賊市と記してあるし、又鳩泥棒と書いてある處も其近くにあるが、其寺を探險する暇もなく、ただ外城の西門の安門外へ畫を描きに行つた序に天橋の下手もの市場の一端も過ぎつた位なことである。

圖には廣安門大街を行く駱駝が畫いてあるが、私も毎日のやうに其門外を通る駱駝を見た。こゝが其通路になつて居るのであらう。此邊はもうずつと場末らしくなり、埃つぽくなつて居る。瑠璃廠の南先農壇の北今野菜市場になつて居る處がもと刑場であつたと云ふ。

城外に日壇月壇地壇の種々がある樣だが、私は忙しいなかを其最も代表的な天壇を見に行つた。三重の土壇の上に三重の青屋根を戴く祈年殿も美しいには相違ないが、私は建物のない圜丘臺に尙一層特色が多いやうに思つた。

北京圖史の史の部分は、上と右との緣に、其市の起原から中世蒙古の統治、マルコ・ポーロの訪れ、明朝とそれにとつて代る清朝、康熙乾隆二代の文化の高揚、其衰頽期、西太后の支配、拳匪事變、革命、首都の南京移轉までが漫畫的に畫かれて居る。英米人は嬉し

くないにしても、若しこれを改版する場合があるなら、圖の方が訂正されると同時に、史の方の支配までが附加へられなければなるまい。

北京雜記

何しろ十日あまりしか居なかつた短い滯在のことであるから、私は見る可きものゝ非常に多い北京を碌々觀ることが出來なかつた。何れ又ゆつくり再遊して其時は見物もし、畫も描きたいと思つてゐる。

誰もが賞めることであるが、左對的にきちんと整つて居る市街、其内城の中央を占める紫禁城の橙黃及綠の釉瓦をいたゞく屋根と赤塗の壁とが綠樹と相映じて可なりの美しさを呈して居る。適度に洋化して居る廣い並木道を走る自動車の數もあまり多過ぎないので、靜かさ保つて居る。實は自動車よりも馬車位が丁度適するのであらう。

私は崇文門の通、つまり東單牌樓の近くの電車路を東に入つた趙堂子胡同と云ふ小路の鐘淵公館を宿として居たが、さう云ふ屋敷町も却々趣がある。鐘淵公館の隣が王克敏氏の私邸であるが、王氏が其處に居ることは寧ろ稀であるらしい。尙其同じ通りに朝鮮總督府の支署もあつた。さう云ふ小路の朱門と土塀、それに一寸樹木が添ふやうな小景も却々いと思つたが、其等を畫にする暇はなかつた。

紫禁城の宮殿は右左中央と云ふやうに圖劃をして公開して居るのであるが、私は單に其中央の部を一瞥したに過ぎぬ。宮殿の建築は近づいて見ると其の材料も仕上げも日本的に立派ではないが、併し大體の規模が大きく、すべてが大まかに出來て居る。屋根の上や中庭の敷石の上に草が生えたりして居るが管理者はそれを除かうとしない。或は手が廻らないのかも知れぬ。

宮殿の階段などに付いて居る大理石の欄干の彫りもの、それは北海の橋欄其他にも繰返されて居る雲龍などの同じ圖案同じ彫り方、其繰返しは單調とも云へるが、又其處に統一の美があるとも云へる。

宮殿などにある廻廊、それと略同じものが上流の私邸の到る處に見られる。仕事の多少の粗密はあるにしても圖案なり形成なりが一致して居る。これは確に支那の特色の一つである。工人が狹い分業で各の傳統を續けて居るので斯う云ふ結果になるのではないかと想像する。

暇がないので私は紫禁城の北に在る景山に登つて全市を眺めることもしなかつた。北海へは二日通つて丘上に喇嘛塔のある中島へ渡る石橋と楊樹とを寫したり、また五龍亭を望む岸にある茶店に憩んで、人がボートを浮べて遊んで居る靜かな池を寫したりした。其處からは五龍亭の方へ渡る船も出て居る。さゝやかな點心に茶を呑んで其處に幾時間を暮す暢氣な客も少くない。其處らの設備にしても皆昔からの建物を利用して居るのである。昔宮廷の人々でなければ見る事も出來なかつた景色を今庶民が自由にして居る譯である。前清を惡しざまに云つては濟まぬ筈である。

北海に比べるとそれに續く中南海はずつと人出が少く靜かである。別段禁制もないと見えて幹の曲つた大きな柳のかげに糸を垂れる人もある。蓮は北海から中南海到る處に生え

て居るが、池水を全く掩ふ程ではない。私の知つて居る夏は赤く塗つた水亭と柳とを荷葉の間に映して美しかつたが、今はもうそれ等の池は全く氷が張つてゐるであらう。

中海のプールの近くに懐仁堂があり、それに接する建物のなかで文部省から出張して居る人達が新教科書の編纂をして居た。湯爾和氏も其處へ顔を出す樣であるが、私はつい面晤の機を逸した。私は其役所へ中海で描きかけの畫を預けたりした。

文部省の人々は崇文門に近い德國飯店を宿として居た。其名を示すやうに獨逸人の經營である。あまり旨い料理とも思へなかつたが、北京飯店などよりも小ぢんまりして取扱ひも親切だと云はれて居た。夏の夕其屋上で飲むビールはよかつた。

北京の芝居

短い北京の滯在中人に招かれて二つの芝居を觀たに過ぎないので、今それに就ての印象

を語るのは甚だ大膽に過ぎる。決して通でも何んでない。單なる門外漢の所感としてこれを受取られたい。

支那劇に關する豫備知識としては、曾て大正八年上海に滯留した時文士出の俳優歐陽予倩氏と相識り、新舞臺に其演戯を觀たり、其樂屋を覗いたりしたのと、西湖に遊んだ時鳳舞臺と云ふのを觀た位なものである。支那研究家の井上紅梅氏とも上海で知り合ひになり、從つて多少支那劇に關して吹込まれたこともあるが、無論深いものではない。

此間北京の西長安街にある長安戯院に荀慧生の芝居を觀たのは八月の二十三日であつたが、それは河北省の秘書林氏に招かれてゞあつた。「西廂記」を譯した深澤氏も其時私と一緒であつた。支那の芝居は日本のと流儀が違つて一つ出しものを幾日も通すと云ふやうなことをしない。豫告によつて今夜何處に誰がかゝる、何が演ぜられると云ふことを知つて時刻を見計らつて觀に行くのである。其晩も前門外で夕食を馳走になつた後、日本時間の十時頃から出かけたのであるから、楊少譜の「戰太平」何佩葉の「查頭關」林秋霎の「六月雪」王文源と吳彥衡との共演する「八大錘」などはもう濟んでしまひ、慧荀生の「貴妃

醉酒」が丁度はじまる所から觀たのであつた。番付に此外題は略して單に「醉酒」として
ある。先づ日本の寄席へ行つたり角力へ行つたりするやうなもので、前座が出て居たり三
段目がとつて居たりする頃はいゝ客はあまり集らない樣子である。
此「貴妃醉酒」は日本へ來た梅蘭芳も演じたと思ふが、私は梅のそれを觀なかつた。荀
慧生の貴妃は巧いことは巧いが品に於て梅蘭芳(メイランファン)のに劣ると云ふやうな評語を其後或人から
聞いた。
私は上海で歐陽氏に賴んで、可なり暑い頃あの重たい衣裳をつけてポーズして貰つたこ
とがあるだけで、歐陽の演じた貴妃其ものを觀ては居ない。よくは知らないが、一方から
云はせると梅蘭芳の「醉酒」は一種の折衷體のもので純花日劇としてこれを演じて居ない
などとも評された。
荀慧生のはさう云ふ觀點からすると本格的なのかも知れない。何しろ梅のやうに痩形で
なく豐滿な押出しのいゝ體格をもつた役者で其こなしやら唱やらに色氣は溢れるばかりで
ある。だから百花亭に待設けた皇帝の御幸がないのに自棄を起して酒を被り、夢高二力士

に戯れると云ふ此劇には持つて來いの人であると思はれた。呑んだあとの盃を卿へたまゝ
身體をそり橋のやうに仰向く彼の曲呑みのくだりに好々の聲がかゝるし、挑まれた高力士
が「沒有(メイユー)」と云つて辭退する時には笑ひ聲が起つた。此のやうな色氣に滿ちた醉態を演じ
得る日本の女形は今誰であらうか、矢張菊五郎か河合あたりより外にはないかも知れぬ。
軍の特務機關で樺島氏に會ひ、氏から湯澤顧問にも紹介された。其時芝居に興味がある
かと訊かれ、あると云つたので、それではと、二十四日の晩東安市場のごたごたしたなか
にある吉祥戯院に催されて居る尙小雲の芝居に湯澤氏が招んで呉れたのであつた。
此吉祥戯院は決して大きな小屋ではないが、梅蘭芳もこゝを發祥の地としたと云ふやう
な由緒のある所であると聞く。
此晩も尙小雲だけを目がけたので、其前の「陽平關」は觀なかつたが、主演の一人王鳳
卿の名は相當に聞へて居る。尙小雲は彼有名な宦官李蓮英の俳優養成所であつた正樂社の
出身であると云ふが、舊型を脱して新風を拓きつゝある、一方からは外道のやうにも評さ
れてゐるが、仲々人氣はあるらしい。小屋は割れるやうな滿員であつた。

湯澤氏の行屆いた注意で、其出しもの「青城十九俠」の極概の邦譯を手許に廻されたので、筋はよく理解されたが、尙の芳居のやり口は筋などはあまり重きを置かぬものゝやうに見えた。支那劇は「のべつ幕なし」の筈であるのに　緞帳が降されて居たのは、呂偉が其娘靈姑と雲南貴州の境界にある莽蒼山に隱棲して居る第一の場面に背景を使つたりして居る爲めである。それは日本劇の模倣と云つてもよく、雪を降らすことなども全く日本風にやつて居た。時代は明が滅びてから十年位經つたことになつて居る。呂偉と云ふのは明末の俠客の一人である。呂偉を宋遇春が演じ靈姑を尙小雲が演るのであるが、此場面の演じ方は可なり寫實的で、雪中を歸つて來た父を迎へ、上の雪を掃ひ落す娘の仕草なども自然的にやつて居た。たゞ日本の劇場と違つて舞臺の幅が狹いから、道具の飾り付なども甚だ窮屈にならざるを得ない。

靈姑の役は梅蘭芳が得意とする靑衣であるが、後に立廻りなどの活潑なこともやる樣になる。

大雪の場のあとは山中の猛獸狩になるのであるが、こゝは全くアクロバツトの見せ場に

なつて居て、虎だの豹だのが手負ひになつてはね廻る。それを社中の筋斗蟲連中が力演して居る。觀客もこれを觀て居る間は筋などを忘れて居る樣に見える。縫ひぐるみを着て居る其れ等の獸達の動作は仲々巧いものである。

昔日の恨みを忘れず報復の爲めに其山にあらはれた惡道士毛覇の爲めに呂偉が討たれる。其かたきを打つ可く、劍仙に師事した結果法術を會得して靈姑が貴州に赴き、都天陣なるものを布いて靑城の十九俠と戰つてゐる毛覇を退治するところが其大詰になつて居る。

此毛覇は「淨」の役柄でつまりかたき役であるが、顏を物凄く隈どつて、特別に濁つた、腹の底から出るやうな强い聲で唱ふ。花旦とか靑衣とか女形に人氣のあつまる事が多い樣に見えるが、また一方かたき役の淨とか、道化役の「丑」などの藝を悅んで居る玄人筋もあるらしい。

「靑城十九俠」と云ふ外題ではあるが、要するに尙小雲の演ずる靈姑の女劍劇が主になつて居て、十九俠はたゞ筋斗蟲やレヴユー式の立廻りを見せるに過ぎない。

結局此芝居は寫實的の雪の場（背景を使ひ雪を降らせる）と其次の動物のアクロバットと、最後のレヴューと、三種のものを包容して居り、觀客はそれを部分的に鑑賞することに平氣である。

日本の歌舞伎劇にもさう云ふ部分的の鑑賞がない譯ではないが、尙小雲の芝居にはそれが極端に行はれて居ると云つてよい。筋斗蟲は斯く云ふ新劇ばかりでなく、舊來のものにも付きもので、それも日本の捕方などのとんぼがへり以上に筋から離れる傾向はあつたが日本でばこれ程思ひ切つて曲藝の爲めの曲藝を見せることはしない。

支那の子役などのする筋斗蟲は仲々巧い。妙な總の付いた帶などを締めてする其趣向は何だかコザツクの舞踊めいた所もある。韃靼が露西亞へ入つて居るのだから、共通な點のあるのが自然かも知れぬ。

最後のレヴューめいた演劇はあまり感心したものではない。レヴューにしてもそれは隨分幼稚なものである。

併し支那の新劇が上述のやうに雜然たるもので決して完成してはゐないにしても、舊劇

以外にさう云ふ新らしいものゝ要求があることは認めなければならぬ。支那人に對して舊劇を守れ、それを保存せよとばかり云ふのは、日本に於て能樂ばかりを保存せよと云ふに均しくはないか。さう云ふ云ひ方は親切でないと私は思つて居る。

蘇　州

私は今度はじめて蘇州を見た。

大正八年の春から初夏へかけて中支に遊んだ時は、運惡くも彼排日騷ぎに際して、私は其最もひどい間を上海に蟄伏し、それが漸く鎭まる頃を見計らつて鎭江と揚州とを訪ふことが出來た。停車場から日本旅館への距離が相當にあるので、若し馬車なり驢馬なりが日本の客を乘せることを拒めば困るからと、領事館員も他の人々も切に私の蘇州行を思ひ止らせたのであつた。排日のはじまる前私は西湖に遊んだが、尙上海附近の南翔に舟遊びを

して鵝飼などを眺め、江南の水鄕氣分を味ふことが出來た。

「姑蘇城外寒山寺」によつて私共は若いうちから蘇州を知つて居た。劍舞向ではないと思ふのに、昔は此詩をも劍舞用詩吟のうちに含めて居た。私の居た私立中學のT先生は英語と漢學とに亙つて居たが、地理をも擔任して、地圖を指しながら、「こゝが蘇州、あの姑蘇城外寒山寺の姑蘇と云ふのは此處のことです」と云つた。其蘇州をはじめて見たのである。

私は十月十四日朝九時の南京行列車で蘇州に向つたが、それは急行であつた。二等も普通旅客の方は滿員になつて居たが、軍屬の私は軍用車の方へ將校達と一緒に乘るの便宜を得た。北停車場も昔と違つて今は反對側に出來た小さなバラツク建である。車輪を附けなほしてゲーヂに合せたやうに聞く。客車は皆日本のものであるから、一寸他國を旅して居るのでない樣な氣にもなる。同乘の將校達の話す言葉が東京辯であつたことも私に親しみを感じさせた。

車窓から見る景色にはしばらく破壞された建物が續いたが、やがて黃色に實つた稻田の

擴がりが美しく、平和な農家の姿などを見ては一寸戰爭も忘れられるのであつた。

南翔崑山を經て十一時頃蘇州に着、停車場司令部から電話をして置いて黃包車で先づ特務機關へ行つた。海軍關係で來た私は上海の陸軍報道部からの紹介を得たのである。

網代のやうなもので掩はれた糧秣の倉のいくつも列んだ荷揚場を過ぎつて城北の濠を越へ平門によつて城内に入るのであるが、もとは城西を濠に沿ひぐるりと廻つて日本居留地の方へ行つたものらしい。此平門と云ふのも後から開かれた樣である。

報恩寺の塔の處から護龍街を眞直ぐに南する。街の兩側には側には僅かばかりのみすぼらしい骨董を列べた店が澤山軒を列べて居る。それは非常に畫的ではあるが、點檢して掘出しものが出來るかどうかは疑はしい。

左折して元妙觀前の最も繁華な街を通つて右に曲り、小さな運河を越へると、家は疎らになり、右に公園や兵舍などを見る、其先にあるのが特務機關である。これも何れ何かの邸を敵產として接收したものであらう。

機關長S中佐にも會ひ、蘇州城内外の案内を賴んだ。中佐は私に附するにO少尉を以て

した。さうしてすぐに自動車で私を敷島館と云ふ宿に導いた。此宿はもと支那の或海軍武官の別邸であつたのを接收したのであると云ふ。平門を入つてすぐ野廣い所に立つ一軒家であるが、窓外に報恩寺の塔が眺められる。

宿に荷物を置いて閶門外の留園を見る。それは可なり荒廢して居るが雅趣はある。大體北京方面の邸宅に比べて中支のそれは多彩的でなく裝飾がさつぱりして澁味をもつて居る。留園門前の道を三哩ばかり北西に行けば虎丘に達する。車を降りて丘麓の町に入るとすぐに麥藁細工の團扇を賣る小兒等と喫茶店の女給達とに取卷かれた。

虎丘の塔は庇が落ちて可なり荒廢して居る。丘上の眺めもあるが、あまり畫にはならない。秋陽を浴びながら記念の寫眞を撮つて丘を降りる途中も團扇賣りは依然として附纏ふ。女給はあやしげな日本語を使つて「サイダ呑むか」などと勸めるが、暢氣なところもあつてそれ程邪魔にもならぬ。彼等の居る喫茶店の入口には「美人招待」と記してあるが、招待は接待の意味であらう。

有名な寒山寺を訪ひ楓橋を見た。楓橋の上は柵を結つて通れないやうにしてある。寒山

寺のほとりでは拓本を造るに忙しく働く人を見た。摺りたての紙は風に吹かれて其處等の草原に散らばつて居る。さうして碑石は墨で眞黑になつて居る。あまりよい感じではない。

城内に引返して孔子廟や滄浪亭を一瞥したが、孔子廟のなかは雀の糞が一ぱいであつた。滄浪亭の側の新しい美術館は空になつて居るが、西洋名畫を模寫した壁書は變なものであつた。

江蘇省政府の庭を見せて貰ふ。秘書の章氏が案内されて、今金をかけて修理中である由を云はれる。これも畫になる所があると思つたがつひ其暇を得ずに了つた。客間に懸つて居る山水畫から陸廉夫のこと、延いては婁東畫派に就て章氏から種々の話を聞いた。

此夜元妙觀の近くで特務機關の人々から支那食を饗され、空腹のせいであつたか少し老酒に醉つた。

あくる朝は宿の窓から報恩寺塔を望む一圖を作つた。宿の前は空地になつて居り、其先にはクリークに架けた小橋があり、楊の森の上に九重の塔が望まれる。塔の右手には本願寺の出張所が入る。楊の圖を描きながら故人滿谷國四郎のことが偲ばれた。曇つて居る空

を風に追はれて頻りに雲が飛ぶ。

元妙觀前の松鶴樓と云ふ支那料理で一人午食を濟ませて特務機關へ行つた。雛絲炒麺はうまかつた。雛絲炒麺の如きは確に北支で食べるよりもうまい。食事の間に小供が煙草を賣りに來たりする。

O少尉の案内で獅子林へ行つたが、其途で上海のS中佐達が外人記者團を案内されるのに出會ふ。獅子林は蘇州の諸園中最も奇麗に保管され手入れが屆いて居る。假山も大規模に造られ、萬壽山の石舫に擬したものも其一隅にある。蓮のある池水は細かな綠藻に掩ひ盡されて、全く見えない。園中の重なる石には獅子林の名の由つて來る獅子石があり、又唐僧取經とか和尚過江と云ふやうな名のついた石がある。

第三日は日曜でもあるし特務機關の人々と郊外に同遊を約したが、其自動車が仲々來ず、午近くなつて了つた。宿の庭を逍遙して見たが、こゝにも小さな蓮池や假山や亭など型の如きものがある。支那人の趣味は窺はれるが、洋風の室内はあまり好趣味ではない。それを又日本人が疊敷になほしたりして悉をかしなものになつて居る。

自動車で城西を吳門橋の近くまで行つたが、濠端の風はうす寒い。これから南へ走つて横塘と云ふ處へ行く。石橋の上に亭の載つた亭子橋の近くの草原で辨當を使ひ冷酒を呑む。私は其處に畫架を立てて水の貫く平野に石橋の孤り聳える圖を水畫にした。黃色くなつた稻田のなかを帆船の續いて行く江南の水鄕は日本の湖來あたりに似てそれより規模が大きい。蝟集する子供達を人は面白半分に追ふ。少し奥へ行けば敗殘兵も居るさうだが、此邊は別段の危險も無い。

城外南東にあたつて湖水と大運河とを結ぶ廣い流れに架つた寶帶橋と云ふ名所へも行つたが、それに並行して別の橋が出來たりして居る爲めもあつて、到底畫にはならない。こんな所にも兵が屯して通行の船を檢めて居る。私は其勞苦を思つた。

私は其晩偶然にも同宿者のうちに吉田博、佐々貴雄の二氏を見出した。二人は九江から屋子の方の前線に行つて居て今其歸途であると云ふ。

上海へ歸る第四日の朝、私は平門外に畫架を立てて運河に沿へる建物の群を寫して居た。空は青く澄んで幸ひに風もなかつた。人は籠から出して數百羽の家鴨を水に放つた。

それが建物の倒映を亂すのも美しい。私の畫の中心をなす建物は何かの廟であるらしく、其前に旗を掲ゲ可き赤柱が二本立つて居る。

通りすがりの一外國婦人は very good と私の畫布を賞め、歩哨の一兵士は私に近づいて、「如何にも秋ですなあ」と云つた。掠奪を許すか金を出すかと云ふ談判にあたつて蘇州の財閥は後者を選んだので、支那兵はこゝを荒さずに退却した、其ために人氣もよいと云ふことである。

南滿雜觀

今日は珍らしく雨となつた。四月二十二日の朝上陸してからの私達に珍らしいばかりでなく、此土地にとつては實に正月頃からはじめての、四ヶ月ぶりの雨ださうである。雨水を溜めた貯水池の水量で心配はないかと云ふことを、今朝ゑ稅關長を訪ねた時訊いて見た

のであつたが、それは今後二百日を支へるに足る、其うちには雨も降るだらうとのことであつた。これは實にいゝ汚塵（ほこり）おさへとなるであらう。

所謂蒙古嵐によつて送られる黃塵の時期は既に過ぎたと云ふ人もあり、奥地へ行けばなほひどいと云ふ人もあつて、自身經驗して見ないと分らぬが、大連に居る間に私も多少黃塵らしいものを見た。其日は大して風もないのに空一ぱいに、黃色つぽく霞んで、例へば南山あたりの手近な山すらが見えなくなる。太陽は其黃灰色の煙靄を通して鈍く眺められる。

風の吹く日と靜かな日とが交互にあつて、風立つ日に舞ひあがる汚塵は恐ろしい。併しそれは遠方から來た黃塵とは譯が違つて局部的のものである。さう云ふ日は洋車（ヤンチヤ）（人力車）も幌をおろす。馬車（マチヤ）も幌をかけるがこれでは半分しか掩はれない。小さな滿洲馬一頭の曳く馬車は露西亞式のものと違つてあまりスピードは出ないが、其暢氣な處が面白いので折々乘つて見る。二人若しくは三人を乘せるによいが、身體をはみ出さすやうにして、もつと多勢乘つて居る場合もある。」

大連の市は此前大正七年に來た時に比べると著るしく擴大されたが、大廣場を中心として放射する町々は仲々覺えにくい。それが完全な蜘蛛の巣狀でないのと、近接する西廣場からも放射する町々があるとの爲めに人の頭を混雜させるのではないかと思ふ。

大連民政署、市役所、大和ホテル、正金銀行、遞信局、米國領事館等の諸建物を以て周らされて居る圓い大廣場は植込みが落着いて來て仲々感じのよいものになつた。放射路の一つから出て來た車は人力でも馬車でも自動車でも皆左廻りと定められて居るので、時には可なりな大廻りをすることになる。併し圓形内の植込みが横斷出來るから徒步者にはさう不便でもない。

着いた時既にポプラや楊(やなぎ)は芽を吹いて居たがアカシアはまだ枯木であつた。それが一週間ばかりするうちに芽を出して來た。汚塵のなかの黃灰色の建物道路と之等の黃ばんだ若葉とつ關係は一種異樣のものである。

私達は大和ホテルを出てよく此大廣場の植込みを突切り、大山通から一寸入つた所にある「此花」で簡單な食事をすることに慣れた。土間の椅子卓子でも、また小座敷でも食事

の出來る此大衆的小料理屋は非常に流行つて居る。さうして廉い割に旨くもある。其中庭の池には雷魚が泳いで居る。雷魚は色も形も鯉に似て稍長く、身體に斑紋がある。

「此花」の日本食でない時私達の姿はよく山縣通の露西亞喫茶店「ヴイクトリア」にあらはれた。それはチョコレートなどを賣る店と喫茶食事の室とに分れて居る。私達は其處でよく露西亞式の、肉の塊の浮いた、油つ氣の多いスープを註文した。私達は或日其處に偶然高勇吉氏を見出したりした。

先着の栗原信、松本弘二二君に迎へられて、私達――藤田嗣治と田口省吾――は着いた日の午後星ケ浦へ行つて見た。私は前に來た時老虎灘へ通ひながらつひこゝへは行かなかつた。

星ケ浦は櫻が丁度滿開で、斜めに海へ降る芝生の上には日本人の花見の群がいくつもあつた。日本流に三味線を彈いたり踊つたりする人達が、立留つて見て居る滿人の眼にどんな風に映つて居るかを私は想像して居た。それはあまり立派には見えないのではないかと思つた。思ひ切つて強い單純な色の衣裝を着けた中流滿人の女達の方が風景中に點じられ

て美しく見えるのであつた。

櫻の花が一寸黄ばんで見えるのはほこりを浴びる所爲でもあるまいか。内地のものに比べてそれは花の附き方が多いやうに見えた。

私達はヤマト・ホテルで茶を呑みながら窓外の春の陽さしを見て居た。海は奇麗な青い色をして居た。

あくる日は藤田田口の二君と金州へ行つて見た。要塞地帶模寫の許可證が貰へる迄は大連間近の寫景が出來ないからである。金州への路は、可なり汚塵つぽいものであつた。自動車道と馬車道とに分けられた廣い道路は可なりによく出來て居る。まだあまり大きくなつて居ない並木は大抵アカシヤか、どろやなぎかである。

道の両側の畑の赤つぽい土の上に所々土饅頭　やうに盛り上げられて居るのは肥料ださうである。

その昔淺井忠の「征清畫稿」によつて想像して居た金州城は案外に小さかつた。城壁も低ければ櫓も小さい。城内を抜けて見たが、何分汚塵がひどいので、私達は其所らに少し

はある畫材を見棄てゝ山間の響水觀へ行つて見た。溪流に沿ふて若干の民家があり、桃や李が咲いて居るのには或風情があつた。寺へ入る少し手前に朱塗の欄干のある橋を見て、日本人が所を辨へず、みだりに日本風を加へる惡習を困つたものだと思つた。これはどうしても石橋でなければならぬ所である。

比較的風の當らぬ山陰に坐を占めて私は和尚山を入れた或構圖を得た。

もと東洋汽船の亞米利加航路で世話になつた、今大連汽船の事務長をして居るO氏に誘はれて一日老虎灘にドライヴした。其日も相當に風が吹いて居た。大正七年に來た時は弟夫婦と一緒に夕暮が幾度かこゝに暮らした。其時畫いた二十五號程の油畫は大和ホテルに懸つて居たのを、近頃になつて要塞司令部が没收して行つたと云ふ。

此處も星ヶ浦同樣に遊山の客で賑つて居た。潮の引いた磯の岩かげに坐を占めて語らふ男女もある。小牌は蓆を抱へて、何處かに坐るのかと我々の跡について來た。崖の上に幾本も列んで立つた稻荷の赤鳥居は周圍に對して甚だ不調和であると思つた。

山路を南山麓に引返した私達は大連神社に詣でた。丁度神前結婚があるらしく、盛裝し

た人達が頻りに入つて來た。神佛相隣りして居る譯だが、西本願寺の輪番を訪ねて私達は大谷光瑞伯が今建造中の浴日莊への案内を乞ふた。それは大連郊外周水子にあつて、前に金州へ行く途すがら既に遠望して居た。

伯自身の設計になると云ふ其建物は圓みをもつた三角形のプランをなした三層樓であるが、まだ外廓だけしか出來ず、内部は仕上つて居ない。併し伯は平氣で其一室に起居し工事を指圖されて居るが、今不在であつた。小高い處に立つ此建物は可なり風當りが强いらしく、扉の砲子はあほりの爲めに破れたりして居る。浴日莊でなしに寧ろ浴風莊だと云ふものもあると輪番は笑はれた。埃の爲めに大連灣と其市とはかすんで瞭然とは見えない。其處らに瓦燒の工場などが散在して居る。

旅順も以前には獨りで行つて、僅かに記念館と爾靈山位を一瞥したに過ぎなかつたが、今度は藤田田口二君に伴れ立つて、東雞冠山の戰跡へも行つて見た。コンドラチエンコ將軍戰死の跡あたりの砲壘のルインでも、水師營の開城交渉の行はれた跡も、すべては三十年の昔ばなしになつて穩かな古色に包まれるやうになつた。

要塞司令部に顏を出して、N副官から如何云ふ處を描いては惡いかの說明を受けたが、私達にはどうもはつきりしない。山の形を變へればよいかと訊いても、よいと云はれないので取つき樣がない。折角許可證を貰つてもこれでは此附近で描くことを止めなければならない。「想像畫のやうに描いたら」と云はれたが、それなら模寫願ひを出すに及ばず、たゞ記憶によつて描いても濟むのである。

私達は關東廳博物館の列品に面白いものを觀て委しい考察の時間のないことを借んだが、島田氏の案内によつて觀せて貰つた營城子の漢代古墳は其甎の構造と云ひ其粗い鷹揚な壁畫と云ひ皆非常に面白いものであつた。それは羅馬のカタコーム内の壁畫の粗さを聯想せしめるものである。

此古墳壁畫の模寫をした人が壁畫製作中の古代畫家を題材とした一幅の日本畫を作つて帝展へ出品した、それが今博物館の應接室に置いてあるのを見たが、恐ろしく悠長な姿をした畫家を聯想したものだと云つて、同行の人達と笑つた。こんな長袖でなしに、もつと簡素な服裝をした勞働者風の畫工が、其壁畫を通して自から私達には聯想されるのであつ

た。

二科會の展覽會は盛況のうちに昨日で終つた。最初は滿鐵の社員倶樂部と滿洲日報社講堂との兩所を會場とする樣に豫定されて居たが、私達が檢分の結果後者のみをこれに充てることにした。道路を隔てた二個の會場に列品を分つことはどうも具合が惡く思へたからである。

滿鐵地方部社會課の主催と滿日社の後援とによつて、此催しは充分の成功を收めた。「大連新聞」の如きも好意的の宣傳をして呉れた、其等も無論與つて力がある。四月二十八日から五月二日へかけての五日間に入場者は七千數百名に達した。勿論それは殆ど內地人で滿人は數へる程しか來なかつた。滿人の智識階級は今大部分新京に移つて居る譯だからそれは當然のことである。

公開當日の朝早川巍一郎氏出品の小さなブロンズ「犬」が盜まれたと云ふ事件が起つた。開會時間の九時にならず、看守の女達のまだ揃はぬ前に一人の男が入場し、匆々にして出で去つたと云ふので、どうもそれが怪しいと云ふことになつた。我々は早速これを警

察に訴へて係官の臨檢を受けたが、盜難の品は出さうもない。多分其前日招待日に來たものが目標をつけて置いて翌朝これを盜んだのであらうが、賣却のためか單なるいたづらか其目的が分らない。新聞は「モナ・リザ事件」と云ふやうな誇大な見出しですぐにこれを三面に掲げた。小品で倒れ易くもあり盜まれる恐れもあるので、私達はそれを針金で臺に結びつけると云ふ注意を怠りはしなかつた。

繪葉書が思ひの外に餘計賣れた。特に渡滿した人達のものは多く購はれた。一人が繪葉書にサインをして呉れと云ふと、それを見習つて我れも我れもと、サイン責めに私達を惱ました。

前に太平洋畫會が其會員の作品を滿洲に展觀した例はあるが、大抵の場合は個人展に限られて居たのであるから、二科のやうな團體展は此土地にとつて珍らしいものであつた。

私達は協和會館で一夕美術の講演をした外、社員倶樂部に於ける有志者の座談會に臨み又滿洲女流美術會の人々から一夕扶桑仙館の支那食に招かれもした。其なかには東京の女子美術を出た人の幾人も交つて居た。食後寄せ書きなどをして居る時私の對ふ側に居た若

い人の姿を描いたのはよかつたが、うつかりM嬢と記して、あとでそれが夫人であることを知つてまごつくなどの滑稽をも演じた。

藤田氏等は夫人達の二三と外へ茶を喫みに行つたやうであるが、私は永原夫人に伴はれて其家に赴き、夫君の蒐集品や自作などを觀せて貰つた。其處には石濤や八大山人などの畫幅があり、また岸田劉生の遺作もあつた。岸田は大連の星ヶ浦あたりで幾枚かの風景を描いたあと歸東の途中に客死したのであるから、水原氏の許にあるのは其絶筆とも云ふ可きものである。

南鮮

十月二十一日夜十時五十五分京城發の列車で湖南線の旅に出た。人に雅叙園の夕飯を招ばれ又カフェーに伴れて行かれたりしたあとで驛に車を走らせたのであるが、此頃は朝鮮

では至る所自動車が拂底を告げて居る。例へばホテルなどで車を頼んだとしても、「お車が參つて居ります」と云ふ知らせを受けて玄關へ出て見ると、其車は早くも他の客の奪ふ所となつて居るの類である。これは宿屋が行屆かないのでもあるが、乘物不足がそれ程に人をさもしくするのである。

其日は午後景福宮へ行き總督府博物館の事務所野守君を頼んで、慶會樓の樓上から畫を描かせて貰つた。階上は、鳩の糞などで汚くなつて居りますがと云ふのを、無理に上げて貰つたのである。なる程其處は久しく誰も入らぬと見えて鳩の糞が一ぱいであつたが、事務所から運ばれた椅子に腰かけて北嶽を望む一圖を作つた。前景は樓へ渡る赤塗の橋、其橋の架つた堀、堀端の松其他の樹々によつて形造られて居る。京城の松の樹頂はよく害蟲にやられると、祕園を案内された下郡山氏の話であつたが、此處の松の樹頂も矢張枯れて居た。それは實によく晴れたいゝ秋日和であつた。私の傍には竹仙堂主人と日新報社の朴君とが居た。新報社からは寫眞を寫す人も來た。畫の濟んだあと私は階下へ降りて石欄に凭れるところを撮つて貰つた。

列車はまだ夜の明けぬ二十二日の四時五十分に論山へ着いた。プラツトフオームへ降りて、私がゾボンの隱囊へ入れて置いたがま口が見えないと云ふのを聽いて、隨行の朴君が急いで列車内へ引返し「棚の上にありました」と云つて持つて來て呉れたのは有難かつた。これは私自身が棚の上に置いたのでなく、寢臺に寢る時ゾボンを吊したボーイが氣を利かして出して置いて呉れたものらしいが、それを客に斷らなかつたのが悪かつた。自身置いた覺えがないから私は其處を捜さなかつたのである。

さて論山から扶餘までの自動車があるかどうかと心配したが、いゝ具合に同車された京城帝大の藤田教授が自身自動車屋を起して呉れたのは大助かりであつた。同じく扶餘へ行く朝鮮の女をも私達は同車させてやつた。定期のバスは八時にならなければ出ないと云ふし、それ迄を論山の宿屋で待ち合はすのが馬鹿々々しいばかりでなく、驛から論山の宿屋までを歩いたりするのも荷物のある旅行者には容易のことでなかつた。

扶餘へ着いてもまだ戸を閉めて居る松屋旅館を起し、火を貰つたり顔を洗つたりして居るうちに漸く東の空が赤らんで來た。朝飯を食べてから博物館へ行つて杉館長に會ひ一通

り列品を見た。藤田教授も其處が博物館の分館となつてからはじめて來たのであると云はれる。

列品は豐富と云ふ譯ではないが、鬼形文や山景文の塼は珍らしいものであつた。又平塚運一君が發見したと云ふ文字の彫られた瓦の斷片に符合するものが後から發見され、それが符合されて陳列されてゐるのを面白いと思つた。それからこれは扶餘の考古品とは別のものであるが、土製陶製金屬製等の馬の彫刻の蒐集が寄託されて居るのを珍らしく眺めたのであつた。

昭和五年の初夏に此地を訪れた時、郡守の元氏に頼まれて古蹟保存會の爲めに扇面の版下を描いたことがあると話したら館長はそれは確に版になつた、私の手許にもあると云つて一本を贈られた。出來た時元氏がそれを送つて來なかつたのは手落である。それは、對岸の沙原から白馬江を隔てゝ扶蘇山を望んだ圖である。

藤田氏の案内で私達は扶蘇山へ行つた。さうして落花巖の上なる百花亭から上流を望む一圖を作つた。白馬江の水は大分減つて沙原が廣く殘つて居る。遠くのはげ山や、堤の上

に列ぶポプラが韓人の爲めに下枝を切られてみすぼらしい形をして居る所など、昔ながらの朝鮮風である。

松が茂るにつれて落葉樹が段々減つて行くと藤田氏は云つて居た。扶餘山の百濟城趾の或部分が壞されて其處に日本の神宮が建てられる計畫は段々進められて居ると云ふ。

皐蘭寺へ降て其處から舟に乘つたが、名所の釣龍臺も水が減つて露はになつて居る。皐蘭寺も其前に樹が茂り過ぎて眺望は利かぬ樣になつて居る。

前に一度見たことのある平濟塔の方を割愛して、二時半の論山發で私は木浦に向つた。藤田氏とは扶餘で分れ、朴君とは論山で別れた。

木浦へは七時一寸過ぎに着いた。驛頭には村上星洞氏はじめ「かりたど」同人達が迎へられ、すぐに星洞居へ導かれた。昭和五年に來た時は其頃の府尹飛鋪氏の官舍に厄介になつたのである。星洞君は合憎京城に用件があつて夜行で立たねばならぬと云はれ、久濶を叙する暇もなく留守でも遠慮なしにと云ひ置いて袂を分つた。

明くる二十三日の朝はよく晴れて風も弱く畫には持つて來いの日和であつた。村上、井

上二人のかりたど同人に伴はれて先づ府尹を訪ひ、其裏山づたひに儒達山へ登つた。前に來た時に在つた茶店は取拂はれて、其處には柱を赤く塗つた亭が立つて居る。

亭が朝鮮流に床板を張つたものだと坐りこんで畫くにいゝのであるが、土間になつて居るので、屋根のかげになつた石の上に坐を占めて、前に描いた——今府廳舍にある油畫——のとは反對の儒達山の低い方の峰と彼方に見える入江とを收めた一圖を作つた。此入江と其向ふの島とには金鑛があるさうで、理研が其開發を心がけ、大河内子も度々來て、海水を干して金を採ると云ふ大がゝりな計畫が立てられて居ると云ふ。

木浦も大分人家が增えて居る譯なのであるが、外の都市が一層膨脹して居るので寧ろ順位は降下した方だと云ふ。木浦は米綿の集散地として、又其水產の爲めに賑つて居るのだが、遊覽地としては殆ど宣傳されて居ない。それで此儒達山上から多島海を瞰下する美しい眺望も充分に世に知られて居ない。

午後はこれも前に一度畫いたことのある木浦臺から三鶴島の方を眺める圖を、前にはなかつた朝鮮旅館の樓上から畫いた。其旅館に經營者が變つたばかりでまだ正式の手續きを

濟ませてないので人を泊めることは出來ぬと、白髯の主人が云つたが、結局其方が座敷から畫を描かうとする私には都合がよかつた。

靈巖郡の半島と三鶴島前は船着きにたつて船檣が林立して居るのを見る。此場所は木浦第一の眺望であるが、日本旅館が斯う云ふ所に陣取らぬのは嘘であると思つた。

其夜は府尹から夕食を饗され、又其あとで星洞居のかりたご句會に臨んだ。

翌二十四日午前十一時の列車で木浦を發し又單調な湖南線を大田に引返した。木浦府尹からの電話によつて、五時前大田に着いたとき野口府尹が驛頭に迎へられ、道廳の官房主事と共に儒城溫泉行の自動車を心配された。

儒城は此前も一寸憩んだことのある鳳鳴館の客となつたが、舊知でもあり、朝鮮へ着いて以來の歡待を受け、溫泉に浸つて疲れを休めることが出來た。夜半二時十五分大田發の列車に乘らうと云ふのだから充分に寢る暇はないのであつたが、それでもしばらくをまどろむことが出來た。道廳のはからひで自動車を運轉手と共に儒城に待たして呉れたので夜半にも拘はらず萬事が都合よく行つた。

二十五日の朝七時十五分私は密陽に着いた。空は曇つて天氣はあまり面白くないが、郡守の迎へを受けて其附けて呉れた鄭さんと云ふ人に案内されて、先づ嘉壽川と云ふ江畔の宿に着いた。

はじめ私は木浦から汽車で順天へ出て、それからバスで晋州に行かうとしたのであるが、時間表を繰つて見るとそれにどうしても一日を要するのできりつめの日程ではどうにもならず、そのコースを思ひ止まつて京釜線を密陽に途中下車する丈にしたのである。

宿からつひ近くにある、有名な嶺南樓にのぼせて貰ひ、樓上から川上の方を見る一圖を作つたが、其間に小雨が降り出して端近に坐る私にはしぶきがかゝつたりした。樓は中々大きな立派なもので、幾段にもなつた階廊の下にある建物に續いて居る所が異趣をなして居る。

六時の釜山行には大分間があるので、私は午過ぎ宿から密陽江の川下を望む他の一枚を畫いた。此處にも水が減つて川のところ〴〵に水草の枯れたのがある。岸には洗濯する女の群があつて其衣をさらす棒の音が水に響く。雨が強くなつて來ても女達は中々洗濯を止

めない。

密陽の驛で待合はす間一人の氣狂ひの女が歌を唱ふのを聽いた。狂つて居るにしても歌の節は決して亂れて居なかつた。

朝鮮雜感

私は十月中滿洲を旅行し往も歸りも朝鮮を通つたが、往きがけは京城に一泊して翌日直々に奉天に立つたので、京城をゆつくりと見物する間もなかつた。それでも李王家の美術館へは行つて見た。此處にはアメリカの博覽會に出品した私が家中の者を大宮公園で畫いた水彩の繪があるので、どんな風に陳列してあるかと思つて見に行つたのである。

京城に着いて困つたのはぶつゝけに行つたので、宿屋が何處も滿員で、鮮銀の人が心配して探して呉れたが、仲々なくて、やつと德壽宮の隣の下宿の樣な妙な所へ泊つた。この

宿屋から德壽宮の庭がよく見え、綺麗だつたので、宿屋から一枚スケツチし、それから朝鮮料理を食べに明月に行つたところ、お書はしないといはれて、仕方なく、名は忘れたがもう一軒の料理屋へ行つて妓生を一人呼んで寫生したりした。

この前の時より京城も大分大きくなつて、東京城、南京城と驛名が二つ出來てゐて、南京城が「ナンキン城」に讀めて、新らしいこれは一寸面白かつた。永登浦が南京城となつたのだが今は工場地としてどん〳〵發展して來たのに驚いた。

大體朝鮮は日本に比べて博物館等が多く、京城には李王家の美術館の他に、總督府の博物館があり、平壤にもあるし、小さい處の慶州にも、扶餘にもあるといふ具合に、近代美術は京城の博物館だけだが、日本より、この點ずつと發達してゐると思つた。

奉天からの歸りには、平壤に一晩泊つて翌日博物館に行くと、合憎月曜日で閉館の日であつたが、折角來たのだからと、裏の方に廻つて見ると、當直の事務員が居たので、賴んで特別に入れて貰つた。此處は近くに樂浪（漢の殖民）や高句麗の遺跡、墳墓が澤山あり其等の遺品は骨董的な物なので、一般の人には餘り興味が持てないかも知れないが、樂浪

の漆器等には、大變良い物があつて、竹の籠に漆をかけ、そこに色漆等で繪を畫いた物などは、とても精巧で美しいと思ふ。漢の物だから、正倉院の御物よりも古い、墳墓も庭に置いてあつたが、可成偉い人の物らしく、良く保存してある。この墳墓も二タ通りあつて、一つは木で圍んだもの、もう一つは瓦で積んで作つてあるが、良く出來てゐて、仲々面白いと思つた。この古いものばかりの博物館の中に日清戰爭の一室があり、その頃の寫眞や戰爭の紀念品が色々陳列してあつた、飛鳥朝時代の物から、一足飛びに明治時代になつてゐるので、少々可笑な氣がして仕舞つた。

博物館は牡丹臺の丘上に建つてゐて、そこから大同江を眺めると、大變良い景色なのだが、最近二十米の高さからは畫けないので、綾羅島に渡つて、そこから牡丹臺を畫いた。この島も普通は行けないとの事だつたが、博物館で連になつた新聞社の人が案内して呉れたので、渡れたのだつた。

京城へは御によく行くのだが、平壤は久し振であつた。この前大正九年に行つた頃は今の樣にやかましくなかつたので、練光亭の上から大同江を畫き、今度渡つた綾羅島を畫面

に入れる事が出來た。この繪は今、龍山の僧行社にある。

十月末、滿洲はハルビン、新京、奉天と廻つて歸つて來ると、冬らしくなつたハルビンに引かへ朝鮮に近づくに從つて秋の盛りになり、滿洲と日本との中間だけあつて、朝鮮の景色や氣候がやはり日本に近いな、と感じられるのであつた。（十二月廿五日記）

承　德

昨年の秋滿洲國から招かれて美術の講演に行つた時も、熱河へ廻るならば其旅程を組むと云はれながら都合あつてこれを辭した私は、特殊輸送の爲めに交通を沮まれて、最初志した東滿の鏡泊湖行が出來なくなつた埋合せに、此夏は新京の滿洲國展審査を終へると間もなく、熱河の旅を志したのであつた。

其途次朝陽に下車して一週日を滯在したあと、私は其處で畫いた油畫の卷いたのを國民

學校の校長和田氏に托しながら、また伴れのない車窓の人となつた。朝陽から承德に至る間の大驛としては葉柏樹、凌源、平泉等があるに過ぎないが、急行でない列車は其間の小驛にも一々停つて行く。幸に車内は空いてゐるが、窓外の眺めは單調たることを失はない。葉柏樹は赤峰への分岐點で人の乘降も比較的多かつた、此驛が熱河省の入口になつて居る。平泉を過ぎる頃から石つぽい山容が大分面白くなつて來て、灤河に沿ひ或はそれを横ぎるあたりに佳景を見出した。保津川下りのやうに灤河下りと云ふこともやるさうである。此灤河は長城を横ぎり山海關の西で海に注いで居る。

晩方八時に着いた承德の驛には伊東忠太博士の令息祐信氏が迎へられてすぐに承德ホテルへ案内された。友人安井曾太郎氏が病を得て長く留まつたのも此宿である。滿人家屋を改造したものだが、其改造しかたは拙くない方である。二つの中庭を取卷く室の配置は概元のまゝにして置いて、室の一部を土間にし、高くした他の部分を疊敷にしたのである。從つて室の各はあまり廣くないが、まとまりはいゝ。中庭には鳳仙花が咲きみだれたり、鉢植の石榴に實がなつたりして居り、北京あたりでするやうな高い日除の下に椅子卓子を

置いて人の憩むに任せてあるのも面白い。八月も半ばになつて朝夕はすつと涼氣を感ずるやうになり、浴衣一枚では冷々することもあつた。

翌くる朝伊東氏の案内で先づ省公署に顔を出して田邊次長に會ひ、離宮の見物に行つた。省公署も離宮もホテルから極めて近い所にある。立派な離宮があるにしてはそれに接する承德の街は極めて鄙びたものである。新市街は別に發展しつゝある樣だが寫景に忙しく暮した私はつひ其方に行つて見る暇を得ずに了つた。併しこれと云ふ産業もない市のことだから發展と云つても大したことはあるまい。

鹿正門と云ふ正門を入ると眞直ぐに正殿があり、その右の細道を入つた所に古蹟調査所がある。其處らはもと宦官や宮女の室のあつた處だと云ふが、伊東氏等は其處で銅圖などをして居る。古蹟を調査しそれを圖にして置く　となどが主なる仕事であると云ふ。古蹟の保存修理は省の管轄になつて居るのであるが、豫算が乏しい所へ此時局下では充分進行しないらしい。

正宮の紀恩堂は南の丘のはづれに建てられて居り、こゝから如意湖が俯瞰される。恰度

特工（特別工作の略）の會議が開かれようとして軍司令官や副官や省次長等が集まつて居たから、新京の吉岡少將からの添書を親しく司令官に渡して寫景に對する便宜を與へられるやうに賴んだ。軍の施設が暗示されないやうにして與れゝばよいとの事であつた。今普通觀覽人は此紀恩堂の處からだら〳〵の坂を降りた如意湖畔の僅かな區域に入ることを許されて居るのであるが、軍の建物が最も明かに眺められるのは此紀恩堂からであるから、本當は全部の觀覽を禁止しなければ徹底しないわけである。

康熙乾隆の間に營まれた離宮内には隨分多くの建物が散在したのであるが、今其等は何れも荒廢して中には消滅したものも少くない。山手の方へは全く足を踏み入れることをしなかつたが、そちらには礎ばかりしか殘つて居ないものが多いと云ふことである。

私は如意湖の中洲の一端から、上帝閣と云ふ三層樓の殆ど骨ばかり殘つて居るのを中心とする一圖を大きなものへ描くことに定めた。池には蒲や蓮が一ぱいに生へて、蓮は恰度花をつけて居る。池のほとりを鹿の歩くのを見かけもした。鹿は山手の方に棲んで居る樣である。池には折々魚が躍り、鳩の鳴くのも廢園の寂かさを助けて居る。

如意湖の北の平坦な草原は萬樹園と稱してもと清朝の皇帝が狩をしたりした處と云ふが今は名のみで樹は殆どない樣になつて居る。其草原の先の方に永佑寺の舍利塔に近く兵舍が見えて居る。舍利塔は下部を除いては御合よく保存されて居るがこれも目標になるから畫いて呉れるなと軍の側から云はれたので、私は畫かないことにした。池の南端上湖と下湖を境する處に水心榭と稱する三つの水亭が列んで居るところでも私は小品一枚を描いた。こゝから柳のかげに清音閣と云つてもと劇を演じた建物が隱見し、蒲の生ふる池を前景として離宮を取卷く繚垣越しに羅漢山が望まれる。羅漢と云つても布袋があぐらをかいて居る形に似て居るのであるが、滿支では布袋も羅漢のなかに入つて居る。此邊の山もみな石が露出して奇拔な線を空に劃して居る。

上帝閣の畫を仕上げるのに私は朝のうち數日費したが、描きかけの畫を古蹟調査所に預けたり其處のボーイに畫を運んで貰つたりするので、大に助かつた。風を防ぐ爲めに杭を三本地へ打込んで畫架の脚を縛りつけるとか苦力に傘をさしかけて貰ふとか種々の便宜を得た。觀覽區域外であるから朝軍へ通ふ將校が通つたりする外見物に妨げられる憂ひも

なく、私の筆は順調に運ぶのであつた。上帝閣が遊光になり樂山に影がある間の八九時頃が最もあつらへ向きで、十時を過ぎては景色が段々平凡になつて行つた　もと上帝の外にも建物があつたのであるがそれ等はみな跡方もなくなつて假山の石組だけが殘つて居る。「天宇咸暢」と云つて康熙帝の選んだ三十六景の一つであるが、鎭江の金山寺にかたどつた故にそれは金山寺とも呼ばれて居る。

喇嘛寺の方は着いた日の翌日伊東氏の案内で先づ一巡して見た。武烈河（熱河）を隔てた丘の上にある普樂寺安遠廟は遠望するだけでそれを訪れる暇がなかつた。そちらへはどうして行くのかと訊けば徒歩で淺瀨を渡るか車に乘つたまゝで越すかするのだと云ふ。普樂寺には北京の天壇の祈年殿に似た黃色の黑根をもつ建物旭光閣が望まれる。其うしろには實に奇拔な下細りのした岩の直立する棒錘山が屏風をなして居る。普樂寺の北には安遠廟の黑つぽいのがある。此遠望は私の如意湖の畫の中にも入つてゐるが、支那式西藏式の交つた四層の魁偉な建物である。

左りに離宮の繚垣を見ながら武烈河の堤防を眞直ぐに行く時は洋車にしても相當ときだる

いのであるが、やがてそれが水のない獅子溝（旱河）を渡つてしばらくすると普寧寺に着く。此寺の前それに接して滿洲國軍の兵舍が建てられたのは可なりに寺觀を妨げて居る。今少し離す方法が無かつたものかと思ふ。此寺には長谷川氏と云つて高野山から來て居る一人の僧が居る。普寧寺の奧殿大乘閣には高さ七丈二尺の千手觀音立像があるので此寺は大佛寺とも呼ばれて居る。此像の上部を三階から見て寫した畫（東洋畫）が滿洲國展に出たのを見たが、これは二階あたりから仰いだ方がよいのではないかと思ふ。併し私自身は昇つて見たわけではない。

旱河を渡つて左へ折れると須彌福壽廟と布達拉廟との大觀が開けて、先づ其規模の大さで人を驚かす。先年安井曾太郎氏が一水會へ出したのは、福壽廟の碑閣から琉璃牌樓と大紅臺との重なるのを眞正面に眺めたのであるが、大きい建物を見るには實は距離が近過ぎて無理だと思つた。色彩的には非常に美しいが、今は安井氏が畫いた頃よりも樹木が茂り過ぎてうるさくなつて居る。

福壽廟の大紅臺の群樓の上は今床の拔ける恐れがあると云ふので普通の見物を入れない

ことになつて居るが、特に許されて私は一處から布達拉の全景を望み、其壯觀に感心した。丘陵の傾斜に段をなして散在する種々の建物と最高の紅臺とを繚垣で取卷いた大きな寺域と、其うしろに列なる山々、寺の手前の民家と、前景に入る福壽廟の垣外の置塔白臺と樹木、それは明澄な空をいたゞいて支那と云ふよりも西班牙伊太利亞の丘上の古市に彷彿たるものである。

寺廟の建物配置から見ると大佛寺が最も相對的であり、福壽廟が稍それを破り、布達拉が一番それを無視して居る、これは地形の關係かどうかを知らない。何と云つても三百尺と云ふ其紅臺の大きな規模には壓倒される。西藏のラツサの建物はこれより一層大きいのであらうが、窓は大部分飾りで目くらになつて居る。或建築家の云ふ處によると、はじめは眼が開いて居たのをあとでつぶしたのではないかと云ふ。其窓の形も普通の矩形でなしに梯形をなして居る。

私は布達拉へは午後を二日通つて北側の或建物の影から紅臺の北端と谷を隔てた繚垣までを含めた一圖を作つた。熱河は雲一つない晴れた空を日恒に仰ぐと聞いて居たが、今年

は天氣に狂ひがあり、晴れは晴れでも雲が多くて折々筆を休めねばならなかつた。

其頃獅子溝には毎日のやうに滿人の兵隊が射擊の演習に來て居て、それが折々交通を妨げて居た。銃を打つ音が離宮の方の山に強くこだまして居た。其山の上の廣元宮から眞下に布達拉の全景が眺められるわけであるから、私はそれを觀る機會を持たなかつた。

喇嘛寺には歡喜天の諸像があるが、大佛寺や布達拉などで見たのよりも、普樂寺にあるのが最も優れて居ると云ふ。喇嘛僧も諸寺に居るのを併せて數十人になると云ふが、一番餘計居るのは大佛寺である。（昭和一六、一一）

旅の思ひ出

三日の旅

勝沼の驛に降りると增穗村のN氏に迎へられた。N氏の令弟は東京から私達の一行に加はつてゐたのである。學院の生徒達と先生の三人とには徒歩で先きへ行つて貰つて、私とN氏とは町から一臺の自動車を招んで、生徒達の遺した荷物と一緒に乘つてそれを追つた。

成ほどこゝらは見渡すかぎり一面の葡萄園である。勝沼は甲斐車窓十景の一つに選ばれてゐるほどのいゝ眺望の土地であるが、今日は惜しいことに雲があつて南アルプスの連山が見えないとN氏がいつた。

私達は先づ雨宮作左衞門氏の大一葡萄園を訪ひ、生徒は園中の食卓で、また聽員はその座敷へ上つて各辨當を使つた。座敷には富岳と牡丹とを描いた文晁の略筆の額が懸かつてをり、また今上陛下東宮時代行啓の御寫眞の揭げられてゐる下金地の袋戸には是眞の氣の

利いた花鳥が描かれてゐた。それらのすべては初代勘兵衛氏から連綿と續いて今日に至つたといふ由緒ある葡萄栽培の舊家を思はせるに足りた。私達は砲子皿に盛られた葡萄の大房をうまい／＼と賞めながら食べたが、性質上果實を多量に攝らない私はその大きな房の半ばしか平らげることが出來なかつた。

生徒達のゐる園の方へ行つて「東宮駐駕之處」と刻まれた自然石の碑の立つ傍で、私は棚から垂下する葡萄の房を手近に仰ぎ見た水繪の小品を描いた。これは私にとつてはじめての經驗であつた。生徒の幾人も私の近くで筆を執つてゐたが、後からどや／＼と入つて來た甲府工業學校の學生達にひやかされたりした。

雨宮邸を辭して私達は數町を隔てた宮崎葡萄園をも見舞つた。その途中にも私達は摘まれた葡萄を籠や函に詰めるのに忙しい家々の前を過ぎさつた。また路ばたの葡萄の葉のなかには稀に朱のやうに紅葉してゐるのを見た。

宮崎の主人は自分ら一行を園に導いて、皇族方の御手植の樹の幾つかあり、「江びかづら色つき染めぬ山梨の里の秋風寒くなるらし」といふ明治大帝の御歌の刻まれた碑の立つあ

たりで、紫玉の幾房を切つて見れたりした。

宮崎氏は大黒葡萄酒といふのを釀造してゐるので、私達はその酒庫にも案内された。横になつた樽の底にはペンキで大黒が描かれてゐた。女生徒のなかには酒の香りを臭い／＼といふのもあつた。ブランデイを蒸溜するところをも見たし、葡萄液やブランデイを呑まされ、また用意の帳面に名前と繪とを描かされもした。勝沼のこのあたりに「武陵桃源」をもじつた「葡陵葡源」の名を與へたものがあるが、その洒落はあまり巧なものではない。

私達は甲府市の大型自動車に乘るために本通りへ出ようとして、その明治時代の建物の殆ど廢墟に近くなつてゐる小さな小學校の前に足を留めた。屋根に塔のやうなものを載せた、所々壁土の崩れた白壁の建物は、青黒い山を背景とし、運動會の豫習に餘念もない兒童らを前景として、極めて畫的なものに見えたのであつた。

豫報通りに今朝は雨となつた。それは急にやみさうもなく見えた。晴れたらば宿を朝早く立つはずであつたが、降つてゐては急ぐにもおよばぬと思つて、私達の一行は九時ごろまで甲府の旅館古名屋にゐた。

生徒達を宿に殘して昨夜私達四人はN氏に招かれて八百竹といふ家に晩餐をともにした。生徒達と別の行動も如何かと思つたが、丁度いゝ機會だからといふN氏の言葉を辭みかねたのであつた。そこで聞いたねんど節といふ民謠の古色を私達は面白いものに思つた。古いといつてもそれは明治時代のものではあるが、このころ到るところにある音頭、小唄の類に比べて特色があり、そのゴツション、ゴツションの囃子が耳に殘るのであつた。

大きいのと小さいのと二臺の自動車に分乘して、私達は御嶽へ行つたが雨では仕樣がないから自動車終點の茶屋の二階に陣取つて、その窓から外の雨景を寫しなどした。コンクリート造の長潭橋が見えるが、夫から奥が昇仙峽になつて覺圓峰、石門等の奇勝があるといふ。茶屋の窓からは川の上と下とが併せて望まれる。雲煙の呑吐する山の姿が大觀氏の墨畫を見るやうであるが、樹々の紅葉にはまだ一寸早かつた。雨はさう強くも降らない。K女史は一人傘をさして橋から上數町の所まで出かけた。寫生をしないものは蓄音器に古いレコードをかけたり小雨のなかを對岸に越して石のころがる岸邊に降りたりしてゐる。そのうち生徒達のけたゝましい叫び聲に何事かと驚く、それは一人の少女が梨を切るとて

拇指と食指との間をナイフで傷つけたのであつた。まだ新らしい緣側に血がぽたぽた垂れたのに私は急いで水をかけて拭かせたりした。

應急の手當はA氏にして貰つたが、縫はなければならぬかも知れぬからとN氏の弟さんが急いでその子を甲府に伴れて行つた。やがて間もなくどーんといふ音がした。今度は誰か階段から落ちたのである。けれどもそれは高い處からでなく幸ひ怪我もしなかつた。階下の店で水晶の土產を買ふものもある。持つて來た御辨當がまづいからこの家の蕎麥を喰べて見ようかといふものもある。小人數にしては相當の騒ぎである。

私は約束があつてその夕方までに佐野の瀑園に行かねばならぬので、一時四十分發の電車に乘るべく一行に別れてバスで甲府にひきかへした。富士身延線には初めて乘るのであつたが、その沿線の風景は私を樂ませた。身延を中心として富士川の上下に中々美しい景色がある。特に電車の線路が川よりも少し高い崖の上を走つてゐるので構圖が具合よくなるのであつた。十島だつたか芝川だつたか忘れたが、雨中を擔いで來た擔架が電車に持込まれて、車中そのまゝ擔はれてゐるのを見るのは奇觀であつた。五、六人がそれに附添つ

てゐた。病氣は何であるか知らぬ。醫者は搖れる電車のなかで注射などしてゐたが、これもまたよくやれるものだと思つた。病人の一行はやがて大宮町で降りた。

富士驛で東海道線に乘換へて後から來る急行を待合はせるころ雨はもう止んでゐた。頭の方は雲に掩はれてゐるにしても裾を引く富士の靑い姿は見えた。

私は昨夜佐野ホテルの古風な洋館に寢た。日本間か洋室かどちらでもと、その持主のW氏にいはれたので、私も、東京から來たI氏S氏もみな洋館の寢臺にやすんだ。一體このホテルは明治二十四年の創建で、大震災に一寸いたんだのをなほしたといふことである。階段でも室內の調度でも皆古風である。私は持主に對つて、むしろ明治越味の室內裝飾を徹底さして見たらまたそれを好んで來る御客もありはしないかといつた。

昨夕裾野驛からこゝに着いて門內の暗いところに架けられた吊橋を渡つて先着の人達に會した時、瀑布の音に言葉も聞き取れぬ思ひをしたが、だん〳〵慣れて見るとそれ程でもなくなつた。私は園內を歩いて六本懸かる瀧——もとは五本であつたからそれに因んで五龍館と稱したを——眺め、屋後の林を拔けて愛鷹を望んだりした後園の一隅から下流の靜

かな流れに森の映るのを寫した。

水郷

近接町村が併合されて大東京を形成するようになつたことは決して嫌ではない。たゞ私の今住んでゐる日暮里渡邊町が荒川區のなかに包含されたことは此町內の住民達の慨歎所とはなつてゐない。日暮里町を省線の內外に分割することが出來るならば七面坂諏訪神社の付近から此渡邊町に及ぶ一帶を下谷區に包容されるのが自然であつたと思ふが、種々の事情でさうは行かなかつたらしい。今まで下谷局から配達されてゐた郵便物が今後別の局の管下に移つて遲れて屆くといふ樣なことがなければ幸である。また荒川區といふ名稱があまり緣遠い感じを持たないでもない。これは三河島尾久南千住等の住民にとつては適當であらうが、根岸谷中に續くところの日暮里にとつては適切でないので、最初上野區とい

ふ說もあつたらしい。多分かういふ不滿は他の諸區にもあつたらうと思ふ。併しそれも習慣さへつけば何時か忘れられて當りまへのように思はれて來るであらう。

明治十五年下谷の御徒町に生れた私は純粹の江戸ッ子として東京の變遷を充分に目擊して來た。特に、繪具函を肩にして近郊をぶらついたことの多い私のやうな者は東京市の膨脹に關する悲喜を同時に味はひ來つた譯である。それは善くなつたともいへるしまた惡くなつたともいへるからである。

私は昔よく町外れといふものに興味をもつて屢々それを繪にもした。例へば橋場の總泉寺に近い淺芽ケ原を小家が圍んで、その小丘に立つ樹木とさゝやかな鏡が池とを辛うじて殘してゐる樣な場合にもそこに或憂鬱な詩趣を感ずることが出來た。今町外れの趣きをそれ程味はふことが出來なくなつたのはこちらの心境の變化によるかそれとも機械文明の急激な侵蝕のためか。兎に角大東京を圍まんとしてその半はすでに出來たかの環狀道路は車を走らすに便利ではあらうが、そこに何等の美しさも見えない。

私は徒に回顧を事とするものではない。向島の堤上にすでに、藁屋根の休み茶屋がなく

櫻の老樹も亡びたとするならば、舊墨堤の聯想を研壞してそれを全く新しい現代の遊步道とすることに贊意を表してよい。大東京の面目を保つ上からも煮え切らないもの、しみつたれたもの、汚らしいものは最も排斥しなければならぬ。實際言問から白鬚に至る間のやうな貧弱な墨堤の死骸を見せられるよりは寧ろ三圍付近の綺麗な近代遊步道の延長されるのを見たい。

大震災といふものによつて未練が一思ひに叩き潰されたことは東京を更生せしめる上によかつたとも考へられる。待乳山の丘上に聖天の御堂と大樹とが燒けて了つたりした跡では竹屋の渡しを無理に保存したとて仕方がない。竹屋ばかりではなく墨田川の舟渡しは殆ど亡びてしまつた。

江東の名所は皆散々になつた。三圍が奇蹟的に難を免れた外は百花園の辛うじて存在するのがある位なものである。柳島の妙見堂も燒けたり、萩寺の萩も疾うに無くなつてをり龜井戸の臥龍梅も四つ目の牡丹も皆過去のものになつた。天神の境内にまだ藤が咲きはするがその池水は汚穢だらけではないか。

私の說く所が城東、向島、葛飾等に偏することを容してもらひたい。下町に生れた私の足は交通機關の具はらない昔どうも山の手に向はずして城東城北の水邊に運ばれることが多かつた。その習ひが性となつたものか、今日になつても矢張荒川、中川、江戸川の水邊に畫材を採ることが多い。さうして人は私の畫に水を取扱つたものゝ多いことに驚いてゐる。

荒川の大放水路は都會を水害から救ふのに必要缺くべからざるものであるだらうが、茫漠として面白い景色ではない。あれのために堀切や木下川は相當に迷惑を被つたが、若しあの江岸の或地點に近代式の料亭を設けたりするならばそれは夏の夕涼味を滿喫するのに適はしい場所となりはしまいかと思ふ。大東京となる以上は都市の中心から相當離れた處にも自動車を驅るべきハイカラ設備があつて然るべきである。

放水路によつて兩斷された中川は新宿から奥戸へかけてなほ相當の畫趣を保つてゐる。また放水路の川口と江戸川とを連絡する新川の船堀あたりに見慣れぬ情景を發見することが出來るであらう。これ等の水鄕は單に釣客と畫家とに委ねられるのでなしに、一般都人

のピクニツク場所としてもつと利用されたがよいと思ふ。

併合された新らしい諸區にも次第に公園の要求が起つて來るであらうが、これは地價などの昂騰しないうちに、早めに計畫を立てなければなるまい。現に私の住む渡邊町付近にも花見寺とか胞衣神社とかいふ候補地があつたのであるが、それ等はもう手遲れになつてしまつた。王子にしても飛鳥山だけでは狹くて仕方がない。稻荷權現から瀧野川一帶を公園にして置くとよかつた。

これを要するに大東京の主義としては古いものゝ殘り得るものは惡く手をつけずに綺麗に殘し、他を全く進步的な近代式に造り替へることでなければならぬ。

武州御嶽

緣故が出來て此頃よく奥多摩の方へ行く。六月は東京府の山林會に頒まれて其處から出す繪葉書の畫稿を描きに行つたのであるが何しろ梅雨の頃でもあるし、日原の溪流を寫しに行つては雨に降られて弱つた。態々伴れて行つた釣師は蓑を被て居るし、岩の上に立つて濡れて絲を垂れるポーズをする位なんでもなからうが、こちらは同行の人に傘をさしかけて貰ひながら漸くに仕事をした。日原の上流の方へは日本畫の矢澤弦月氏に行つて貰つた。繪葉書は四枚一組を二人で半々に分擔し、二組を作るのであつた。

今度東京市水道の爲めに設けられる大きな貯水池の下に埋沒することになると云ふ小河内へも行つて見た。其處には溫泉もある。一村を擧つて北海道に移住することになると云ふが、永年住み慣れた土地を見棄てゝ遠く北へ行く人々の境遇は同情するに足りる。併し

私の見たところでは、風景其ものは大したことはない。風景の見地からは、これを失ふのにそれ程の苦痛もない。

氷川はもとから聞えて居たが、氷川も鳩の巣も前に行つたことはなかつた。氷川の三河屋と云ふ宿には眼の悪い娘さんが居ると云ふことを、昔友人達から聞いて居たのであるが今それが女將となつて居り、其友人達の古い噂話も出た。彼女は東京の女學校に入つたと云ふ、當時の珍らしいハイカラ娘の一人であつた。

併し氷川あたりは奥まつて幽邃にはなるが、溪があまり迫り過ぎて、空が畫面に入りにくゝなる。私は寧ろそれよりも手前萬年橋の上流を自動車道路から縱に見る小丹波のあたりが眼界の開けた大きな圖になると思ふ。

青梅電車の終點御嶽驛のそばには、河鹿園だの和哥松だのと云ふ料理屋旅館があり、射山溪と云ふ名所になつて居て、人は其處に石に激する奔湍を見ることを悅ぶが、昔とはまるで違つた俗化したものになつた。

御嶽へは、其後これも東京府と地元とが山上に拓いた遊歩道と亭などの命名を一般から

募集した、それの審査を頼まれて行つた。それは八月の末で大分暑かつた。

ケーブルカーをあがつた廣場から富士峰、大塚山、また神社のある所から二十町位を尾根づたひに行つた日の出山展望所までに名を附す可き道路と亭とがあるので、私共は其實地を踏んで見ねばならず、汗を流しながら、こんなに歩かねばならぬとは思はなかつたと、同行の肥滿した久保田萬太郎氏は悲鳴をあげて居た。

其時は神社に參詣して社務所で午食を饗されたが、給仕する女達は社の下の寶亭と云ふ茶店から出張して居た。私は昔十六の夏に、一人の畫友とつれ立つて、はじめて奥多摩（其頃は奥多摩と呼ばず「多摩川上流」とのみ云つて居た）に旅した時、少し霧のかゝつて居た神社の境内、拜殿の横から斜かひに奥殿と末社の幾つかを入れた一圖を作つたが、其處は末社のある一段高い處へあがる石段も概昔のまゝであつた。

それから今一つの思ひ出は、或御師の家の門と其前の路ばたに立つ燈籠とを寫して居る時、其家から出て來た人に咎められたことである。「何をして居るか」「その家を寫して居る」「何故寫す？」「面白いから」「斷りなしで他の家を寫す法はない、すぐに止めなさい」

と云ふやうな問答が行はれたが、私は止めないで到頭それを畫き上げたのであつた。其場所も門の屋根が葺き代へられて居る位なものである。

私は今度記念として其舊作水畫の二つを額へ入れて山上に寄贈することにした。前者は御社へ奉納し、後者は私の今度幾日かを泊めて貰つた林氏に贈つた。

林氏も御師の一軒で、天保五年の刊行にかゝる「御嶽菅笠」と云ふ道中記に「杉の林の枝しげく」と家名が綴り込まれて居る其林家であつて、もと三十六軒あつたと云ふ御師のなかでも最も構への立派なものである。それは極めてがつしりした造りで、崖の上に立ち、杉檜の大木の間から澤井や惣岳山の方が見晴らされる。又右へ寄つては日の出山が望まれる。私は二階の縁から其日の出山を眺める一圖に着手したが、天氣の都合が思はしくなくてそれはまだ仕上がらずに居る。雜樹は漸く少しばかり色づいて來たが、常綠樹の多い山だから季節が移つても綠の色はあまり減じないであらう。

林氏の先代は敷寄者であつたらしく、私の居た室には、柴舟の幾艘に月を畫いた容齋の掛物と、富士の前に長橋と泊舟とを畫いた同じ人の横額とが懸つて居たばかりでなく、下

の座敷にはなほその人の十二ヶ月屏風の一双もあつた。其等は大抵容齋が七八十歳頃の作である。なほ其處には私の祖父鶩湖の門人であつた中嶌杉陰と云ふ人の山水双幅や、父と親しく交つて居た猪瀬東寧の山水の襖があつたりして、なつかしい思ひをした。「爲善最樂」と云ふ一六の書額、勝海舟の大書の襖などもあつた。

杉陰と東寧とは父の晩年や其死後などに私も會つて知つて居たのである。

ケーブルカーで登つた富士峰下の廣場から崖畔の新道をしばらくすると、御師の家々が路傍に散在するが、長屋門の朱塗りになつたのや、春の頃講中を泊める爲めに大きく建てられた母屋の茅屋根の形などが面白い。惜いことに其或ものは亞鉛で葺き代へられて居る。經濟事情もあるが、一つには茅を產する所が山中に減つた爲めでもあると云ふ。交通が便になつて、今日は講中でも日歸りの客が多くなり、從つて御師の宿泊設備も必須のものでなくなつたらしい。（昭和一二、一一）

江村晩春

江の村は午を過ぎたり四つ手網あがれるところやなぎ青みて

これは大分前に詠んだ私の腰折であるが、中川あたりの晩春を思ひ浮べたものである。横長の畫布に觀るやうな、斯う云ふ平らかな畫趣は、子供の時から、關東生れの私には親しいものであつた。

テレビン油や亞麻仁油のにほひをはじめて嬉しく嗅いだ明治美術會の會場に、私は疾く斯う云ふ風景の寫されて居るのを見た、さう云ふ趣の畫は不同舍の人達や淺井塾の人達によつて其頃屢ば畫かれたものである。

曾ては桃の名所としてよく都人士の足を運んだ越ケ谷などに、今は泊ると云ふことも殆ど考へられないが、明治の末頃私は越ケ谷町の街道に面した或商人宿を根城として、吉川の晩春を少し大きな水畫に描いたことがある。其畫は折角の努力にも拘はらず、カドミュ

ームの黄にエメラルド・グリーンを交ぜると云ふ不用意の報ひによつて、變色の結果破棄して了つたが、其時溝谷國四郎も元荒川に架かる橋の際の舊本陣を宿として居たので、一夜彼を其處に訪ねたのであつた。

吉川は元荒川が中川上流の古利根に合流する所であるが、私は大正五年の晩春其處に遊んで、此文章の冒頭に掲げた歌其まゝの圖を水畫に描いた。それは彼花かと見える野うるしと云ふ草の新芽の黄色いのが河原の青草の上に點在する時季を一寸過ぎた、欅の若葉のつやゝかな頃であつた。

吉川邊の古利根も元荒川も皆改修されて今はもとのやうな趣を減じて居る。土木の人達は岸を一直線にして堤に樹木を植えないと云ふことを信條として居る樣であるが、改修の結果は恐ろしく殺風景になることを免れない。

吉川の上流松伏あたりになるとまだそれほど改修の魔手に歪められて居ず、野田行のバスを堰枠のところで降りて下つたあたりなどは、兩岸の堤の外に畑や草原や蘆生ひなどがあつて水ひた〳〵の汀の趣を樂しむことが出來る。

田植の前まで堰枠から上の水を溜めて置くので、どうかするとそれは隨分の分量になり、岸に生ふる樹の根元を浸して居ることもある。

松伏から上の古利根沿岸を、水郷ハイキングのコースとして京成電車が宣傳して居る爲めに、もとは釣師や畫家が行くに過ぎなかつた靜かなこの邊も、土躍日曜あたりには今相當な人出を見るやうになつた。

松伏の堰枠から少し上へ行くと其處に渡し場があるが、其附近の森や岸の具合がなかなかよい。私は其渡しに乘つて見なかつたが、對岸には麥の間に菜種の黄があつて、風のない日ならば、舟が森の倒映を僅かに亂して行くところなど風情に富んで居る。

併し私が畫架を立てゝ居るそばを、ハイカーはスタ〳〵通つて行く。美しい江村の風景を樂むのではなく、「先に何かありますか」と云つては徒らに先きへばかり行かうとする。だからさう云ふ御客には越ヶ谷と岩槻との間の元荒川沿ひにある第六天のやうな目的物のある方がいゝのであらう。其第六天と云ふのへも一度行つて見たが、其處にも一つの水門があつて、堰かれた水が澱んで廣くなり、川と云ふよりも沼の趣をなして居る所があ

る。櫻の花の頃には可なりの人出があつて幾軒かある茶店小料理店も賑ふらしい。

岩槻へは大宮から粕壁行のバスで二度ばかり行つたが、堤は櫻の並木があつて、花どきは綺麗であらうと察しながら、つひ早春の枯木のときと葉櫻になつてからとを見たに過ぎない。御林公園と呼ばれる城趾は一寸變つた處であるが、毎は極めて淋しく、其處には杉などが小暗く茂つて居る。

岩槻はもと大岡氏の領地であつたが、昔の名殘を留めて居るのは街道に近く畠のなかに立つ鐘樓だけである。さうしてその傍に來歴を記した石碑が立つて居る。

伊豆の春

今でこそ熱海と云へば東京から行くに最も便利な避寒地として流行を極めて居れ、僅か二十年ばかり前には人車とか軌道車とか云ふやうな貧弱な交通機關の國府津から通ふのが

あるばかり、若し海路をとるとすれば下田行の小さな汽船で而かも惡い船着を我慢して熱海の濱に上陸する外はなかつた。思へば迅速な進歩である。早くから拓けて居る伊太利の名所などでは、二十年を經過してもそんな急速な變化はないのではないか。馬車が自動車に代る位のことはあるにしても。

人車と云ふものは東京に近い柴又にあつた。今高砂から京成電車が分岐して居る彼處を人車が通つたものである。要するに他の動力を用ひず、人が後から押してはずみをつけ、滑走の間は後押しが車上に憩むと云ふ趣向である。柴又のは勾配はないから押す方が餘計力めなければならぬが、國府津から熱海行のそれには多少の勾配があるから後押しの樂の出來る處もあつたらう。たしか大正十年の春私が熱海へ行つた時はそれが人の押さない軌道車と云ふものに變つて居たかと記憶する。

それは暮から正月へかけての客の多い時期を過ぎた頃であつた。露木旅館に泊つて居る知人に招かれて一週間位を滯留したのであるが、既に汽車の敷かれることは豫定されて居て、今の驛の附近に思はくの賣地は出來つゝあつた。私は其處らの段々畑を海へ向けて降

りたあたりや、熱海ホテルのまだ建たない其敷地のところなどで畫を描いた。露木の主人が記念に描いて與れと云ふので、板を削らせて其樓上から家越しに青海を望む一枚を作つた。それは今尙宿に保存されて居るのであらう。

錦浦へ行く途中、今綠風閣といふ料理屋のあるあたりから熱海の方を顧みるものを描いたり、又其錦浦から少し先きの方で、若い女の子を連れて放浪する上野山清貢氏に出會つたりした。上野山氏も其頃はまだ文展で認められなかつた。

當時露木の別館に高島北海が泊つて居たり、又鈴木屋には蔦谷龍岬等が居り、熱海の町に日本畫家の數が多かつた、其等の人達が集まつて居る鈴木屋の宴席へ私も列つたが、蔦谷の酒の上の惡さを私は其時はじめて知つた。平常大きな聲も出さぬやうなおとなしげな男があゝも荒びるものかと思つた。

歐洲大戰の影響で佛蘭西の繪具の製造が惡化したらしく、其時私の使つたルフラン社の白が何時迄經つても充分に乾かず、其上に變色したりして私の畫は損害を被つた。

伊豆山の相模屋に居て與謝野氏夫妻や平野萬里、茅野蕭々其他の諸氏と歌を詠んだりしたのは其翌年の春であつたが、其時も矢張り軌道車に乘つた筈である。

伊豆山から自動車で湯河原に廻つた。途中路の狹い所で車に行會つたりする時は相當危い思ひをした。湯河原は畫の對象としてあまり面白い所ではない。赤ペン黑ペンと云ふやうなあやしげな家のあることは一寸小耳にはさんで居たが、私は其黑ペンの塀の側に畫架を立てゝ川下の方を望む一圖を辛うじて作つた。

落合の橋を渡りて春芟の人歸り行く赤塗りの茶屋

三味線をみづからもちて霜どけに裾をかゝげて心もかろし

の二首は何れも赤ペンの蕊者を詠じたものである

外遊中關東大震災を知らずに濟ました私は大正十五年の一月日本水彩畫會の人達と再び伊豆山に遊んで、また相模屋の客となつたが、其時眞鶴の手前あたりで崖くづれのために一部落埋沒の悲運にあつた所などを見た。

同遊の富田溫一郎氏其他は千人風呂のなかを立つて歩く競爭などをして興じた。

伊豆山へは其同じ春家族をつれて三遊したが、幼兒は深い千人風呂へ入ることを恐がり

もした。姉の家へ贈るべき梅竹圖の資料を探すと云ふ用事を私はもつて居た。

梅林の梅はもう末になつて居たが、私は熱海町への入口に近い山畑に、梅と篠竹との自然の配合を見出すことが出來た。錦浦の方迄行つて疲れて歸る汽車のなかに居眠る少女を鉛筆で卽寫したものが記念に殘つて居るが、露木で土產に貰つた蜜柑を手にして眠る女兒は私が巴里で買つて來た洋服を着て居た。

昭和二年の一月の末には母と四女とを伴つて熱海の梅林を描きに行つた。其時も露木の客となつたが、まだ幼稚園に行つて居た四女は女中達から頻りに可愛がられた。梅林で私が水畫を描く間母と女兒とは少し末がたの梅の花の地上に落ちたのを拾つたりして居た。近松秋江氏に梅園で出會つたのも其時ではなかつたかと思ふ。

熱海ホテルと云ふものにはじめて泊るやうになつたのはそれから二年を經た昭和四年であつた。暮から新年へかけては込むであらうと察して五日に行つたのであるが、それでも着いた時は滿員であつて、子供達を多勢連れて行つた私達は一晩だけを一階の洋間に寢た。それも數の少いベットにごたごたに一夜を過ごしたのである。小用につれて行つた五

つになる男の子が同じ室に設けてあるタイル張りの風呂に落ちて泣くやら、其處に少し殘つて居た水に衣服が濡れるやらした爲めに、妻は甲聲をあげて洋室を呪つたりした。實際溫泉の方に家族風呂の設けもあることだし、客室にあんな拙い風呂を添へる必要はあるまいと思はれた。殊に洋式の置風呂でなしに床を切り下げて而かも緣のないタイル張りの風呂を設けたのが惡かつた。併しこれはもう改造されて居るかも知れない。

人が減つてから私達は海を見晴らす方の和室に移され、其處からの眺めや、子供達の喜ぶあの廣い芝生を降りた、プールの近くなどを畫にした。小學校へ行つて居る子供達と妻とを先へ歸して入れ代りに母を迎へたが、母は陽のあたる食堂で朝飯をたべながら、こんな樂をしては勿體ないと云つた程其境涯に滿足して居た。

雲仙と高千穂

五月の末雲仙に四五日居たあとで私は日向に廻つた。

雲仙はゴルフ場の近くに、みやまきりしまの咲き亂れる草原を前景として、三角の形をした矢嶽と遠く天草の山とを望む一圖を作つた。これは他の國立公園を畫いた諸家の作と一緒に内務省の會議室に掲げらる可きものである。

雲仙の躑躅は大部分みやまきりしまで輪の小さな花が密生して居る。色には紅の幾チントと丹がゝつたのと種類が分れて居る。其間を點綴するのは大つげの黑ずんだ葉である。私は松の樹蔭に立つて、これを三日ばかりかゝつて完成した。折々雲が日を掩ふことはあつたが、それでも幸に晴天が續いたのでよかつた。

一通り御案内するやうにと云はれたから山へも登つて見て呉れと公園事務所の園主事に

勸められて、私は野嶽と云ふのへ登つて見た。普賢嶽と云ふ一番高い處は止して、野嶽まで駕籠へ乘つて行つた。私はずつと昔箱根蘆の湖畔から宮の下まで山駕籠を試みたのと、支那でチエーアに乘つたことゝはあるが、今度のは其後の珍らしい經驗であつた。駕籠へ乘つて一寸珍らしく思つたことは立つて歩いて居ては氣のつかない路傍の植物や石などを手近に見ることの出來る點であつた。遠足の中學生の一群などはさも意氣地がないと蔑むやうな表情をして傍を通り過ぎたが、私は駕籠の御蔭で疲勞と流汗とを省くことを得、從つて仁田峠の上と野嶽の一端とで油繪のスケツチを二枚もすることが出來たのである。

野嶽からの海や山の眺望は廣いが、それはパノラマ的になつて、畫にす可くもなかつた。私は島原の女學校生徒達の暫く休息して居るつげの生ふる芝原に坐つて、岩の出張つた小景を畫いた。北邊の躑躅はまだゴル場附近ほどに咲き揃つて居ない。ジグザグ形の坂を降りる時駕籠屋は其急カーヴで大分困る樣に見えたから、私は歩くことにした。峠の上で畫いた方は案内をして呉れた公園事務所のSと云ふ人に記念として贈ることにした。

はじめ九州ホテルに宿を定めやうとしたのであるが、それが亜硫酸瓦斯の煙のあがる地

獄に隣りして居るので、私は晝の變色を氣遣ひ、さう云ふ煙りから比較的遠かつた有明ホテルに泊ることにした。盛夏北邊のホテルは皆滿員になるらしいが、今は寧ろ空いて居た。有明ホテルには主として上海あたりから來て居る外家の五六群があつた。なかには隨分長く滯在して居るのもあり、又例年のやうに來るのもあつた。

ホテルからさう遠くもない白雲池と云ふのへ通つて其處をも晝にして見た。池はあまり大きなものではないが、周圍が森で圍まれた靜寂愛す可きものである。私の晝中には妙見岳が入つて居る。

私は五月二十六日の朝早く自動車で山を降つた。往路は千々石の道を取つたが、降りには小濱を經由した。其方が多少廻りになるが路はいゝ。さうして眺めもいゝ。

長崎へ着いては早速縣廳を訪れて雲仙の晝を知事に示した。內務部長は其一寸惡くした片眼に繃帶して居られたが、有名な迎陽亭に午餐を供された。昔上海からの歸りに、此地へ寄つた時は、其頃まだ三菱造船所に勤めて居た同門の奧山恒五郎が私を案內して呉れた、其料亭は富貴樓であつた。迎陽亭の料理は今度始めて口にした譯であるが、それは仲

々美味であると思つた。坐に侍した藝者達は幾日か前博覽會の演藝館の出番に、非常な風雨に會つて散々な眼にあつたことをこぼして居た。私は丁度其風雨のあとで雲仙へ行つたのであつた。

長崎には文化學院美術部の卒業生達が五六人來て居た。大浦の川に沿ふた、名だけはいかめしい "Golden Eagle Hotel" と云ふのに泊つて居たが、其荒れた異樣な建物に附纏ふエキゾチズムが皆を悅ばせたらしい。連中は前にもこゝへ來たことがあつて既に馴染になつて居るのであつた。それは彼天主堂からさう離れても居ない。雲仙へ登る前一晩を私も長崎に泊つたが、旅館が皆塞がつて居たので、平野屋の下にある "Hotel Japon" と云ふのを宿とした。これも名は偉いが、隨分さびれた Terible なものである。今は船の入港するものが少く、造船所によつて僅かに生きて居る長崎には外客を接待すべき設備が殆ど失はれて居る。

私は二十六日午後二時の急行で博多に走り、其處で加藤夫妻や直隅君大河原君等に迎へられ、其夕を東公園の一方亭で御馳走になつた。一日のうちに長崎と博多との一流料理を

重ねて味ふなどは甚だ贅澤であつた。九州日日の支局に居つて旁「うわさ」と云ふ軟派雜誌にも執筆する大河原君は頻りに其博多節を聞かせて坐を賑はした。私は加藤博士の許に一夜を厄介になつた。

博多を朝八時過ぎに出る列車で私は小倉を經由し、其午後延岡に着いた。急行のない日豐線は相當退屈する筈であるが、キユーネルト・レツヂーンと云ふハンガリーの一青年が書いた「地獄の門」と云ふ小說を讀み續けてどうやら紛れて居た。其小說は獨逸語から英譯されたものであるが、ミリタントの一カトリツク青年がスパイとなつて露西亞に入り種々の苦勞を重ねることを取扱つたものである。私は羅馬の場合によつてさう云ふスパイの或數がサヴエートに潛入すると云ふ事實があるのかと思つた。それは大體に於て寧ろ夢幻な小說であるが、悲慘でも滑稽でもあるサヴエートの實情を知ることにも私は或興味をもつた。

延岡へ着いて早速五ヶ瀨川の夕方を見に行つた。それはゆつたりしたいゝ景色である。川舟に柳の木、可愛嶽方面の山々を遠望するのもよい。延岡は最近窒素肥料、ベンベルグ

人絹火藥等の諸工場が出來て市制も布かれ、甚だ活氣を呈して居ると云ふ、私は其規模の大きな工場の外觀を一瞥して成程と思つた。

空くる日は五ヶ瀨川流域に沿ふて遡り、右折して行縢(むかはき)神社に詣でた。小暗い森林の入口行縢山の麓にある小さな社である。行縢山からは瀧が落ちて居るが、今水が濶れてそれは細そりしたものになつて居た。私は其瀧壺へは行かず、これを遠くから眺めて一圖に收めた。此附近には日本武尊熊襲征伐の遺蹟がある。

日の影と云ふ所に午食をして高千穗峽に入つたのであるが、日の影は仲々畫趣に富んで居るからこれを一度物にして見ようと思ふ。其處で燒かせた鮎も旨かつた。

高千穗峽は隨分狹い谷であるが、神橋附近に一寸纏まつた奇景の數がある。私は蘭(らんよう)の瀨と云ふのを一枚の水繪にしたが、之などは奇趣の少い方である。たゞ其邊の石に恰も人工を施したかのやうに圓い穴の掘れて居るのがあるのを怪んだが、それは永い間の水の作用で出來たものであり、瓶穴と呼ばれて居る由を說明された。尙川に沿ふて危かしい所を案內される間に小規模の瀑のやうな靑よどむ水を瞰下したり、兩岸の斷崖が迫つた所に數

條の瀑布の懸かるのを神秘的に眺めたりした。明治十年の役敗餘の薩軍が可愛嶽から山づたひに此方面へ出て來て、北川を飛び越えたりして水に落ちたものも少くないなどゝ云ふ話をも聞いた。

私は一夜を高千穗の町に泊つて翌朝小學校の校庭から、五瀨命、三毛入野命、稻飯命、狹野命（神武天皇）四王子の御誕生の地と傳へられる四王子峰を寫した。はじめは霧に掩はれて居たが、間もなく陽があたつてそれは稍あからさまになり過ぎた。四王子峰にも登る暇なく又それに接する高天原、天の岩戸などゝ云ふ傳說の諸地を親しく見舞ふことも出來なかつた。こゝが天孫降臨の地と傳へられて居るのであるが、霧島の方にも高千穗峰があり、王子原があつて、二樣の傳說が併存して居る形である。遺物の發掘等に徵して日向一帶に太后の遺跡があることは疑へないにしても、其地點を確定することは實際六かしいのであらう。

南日向の海邊

熱帶植物の茂る靑島のことはかねて人からも聞かされ、寫眞でも見て居た。私は六月三十日縣廳公園課のM氏の案內　それをまのあたりにすることが出來た。小さな島に檳榔樹が一ぱいに茂つて、遠望すると、其葉尖の黃ばんだのが見える。檳榔樹とは違ふ。これはビロウ樹〻と島〻は云つて居るが同類のものには違ひない。所が變るので自から多少の相違を見せるのではないか。種子の自然漂着によつて繁殖したと云ふ說と、此島に漂着した南洋人が植えたと云ふ說と二つあるさうだ。此島に限らず、外にも此種の熱帶植物の生ふる所は此邊にあるさうだが併し此處程に密生して居るのはないらしい。

私は旅館廣瀨支店から島を望む一圖を作つたが、庭先の松を入れなければ、それはどうにも圖をなさなかつた。

青島の周圍に見えて居る波狀の岩盞はそれから南の斷崖地にも續いて居る。これは泥板岩砂岩からなつて居るさうだが、風雨に曝されては脆く、併し鹽水には碎けないのだと云ふ。それが定規でゞも引いたかのやうに規則だつた並行線を汀に描いて居るのが奇觀である。

私達は青島を離れて一氣に南日向の要港油津まで車を走らせた。もう其町の入口に着いた時は夕方であつた。さうして廣手川の口に近い一料亭に、町の人達から迎へられた。

私は翌くる朝早く皆の起き出でぬうちに宿を出てひとりで濱邊を散歩した。岸に上げられた小舟に坐つて灣内の曉を寫した。ほんとうの朝めし前の仕事である。歸つたら他の人達は私が何處へ行つたかを氣遣つて居た。

梅ケ濱へ行つて濱邊に岩の立つところを畫にした。私の畫架を立てた所は丁度いゝ具合に日蔭になつた草原で、其所には黄色の花が點々として居た。畫いて居るうちに潮は次第に引いて行つた。

名勝地の指定をうけるには松原のなかの墓場が疵になると、此間視察に來た國府犀東氏

も云つて居たさうだが、それは全く惜いことである墓場が今少し濱から退いて居れば申分ないのであつた。高間惣七氏を知ると言ふ服部氏もやがて其處へ來合はされた。

梅ケ濱の景色もいゝが、私は灣内の方も仲々惡くないと思つた。それで灣を瞰下ろす高みにある一料亭の二階から別の一枚を畫いた。庭先の櫻の樹が茂りすぎて邪魔になると、主人に賴んで其枝を曲げてしばらく縛つて置いて貰つた。櫻の葉かげに遊廓の屋根が隱見するが、それは別に障りともならなかつた。

油津の歸りに私達は鵜戸へ參拜した。海波の爲めに穿たれたらしい斷崖中の洞窟に祀られた此官弊大社は第一に其位置に於て尋常でない。朱塗の玉橋の處で皆穿物を脱がねばならぬ。海員の一むれが裸足で砂利を踏んで其洞窟内の御社にかしは手を打つのも何となしにいい感じであつた。境内は塵一つない程によく淨められてすぐ外の海に起伏する黄土色の奇岩に濤の碎ける音の聞えるのも神々しい趣を添へる。御土產物としてちゝ飴と云ふのを賣つて居る。もう日が落ちやうとして私達が參詣客の殿りであつたが、其私達が勸めに應じないのを飴賣りの女共は物足らぬ顏して見送つて居た。鵜戸から少し行つた處で私達

の自動車は機關に故障を生じて、二十分ばかり停車しなければならなかつた。

日の影

私は七月の末數日を宮崎縣西臼杵郡七折村の日の影と云ふ處に滯留して畫作に從事した。それは延岡から五ケ瀬川を遡つた、自動車で一時間半ばかりかゝる山間の小驛である。普通の人には殆ど滯留の價値なしと思はれる場所であらうが、私は五月の末一度てゝを渦きつて其畫趣を見つけたので、今度それを實現したのであつた。

着いたはじめの一日は大變涼しくて流石に山間だけあると思つたのであるが、其後は晴曇半ばする驟雨模樣の日が續いて可なりに蒸暑い思ひをした。

其處には數軒の旅館があるが、私は日の影橋と云ふ珍らしく堅固な吊橋の袂に在る中村旅館と云ふのを宿とした。こゝはこれより上の高千穗峽からの水と日の影川とが落合ふ所

に當つて居て眺望の範圍も比較的廣いのである。

私は毎朝其の二階の角の座敷――八疊の――から對岸岩井川村の一端を畫いた。岩井川と云ふ村は隨分廣いものゝ樣であるが、其役場や公會堂、信用組合などの主なる建物は皆こゝに集まつて居る。私は川の曲り角に突出た岩盤と其處に在る粗末な小屋のやうな建物、白堊でなしに亞鉛張りに白ペンキを塗つた藏のやうな建物、其等が朝日を受けて光り、それに對する側の山が陰になつて居る時間を選んだのであつた。其仕事は七時から九時頃迄しか續けられない。

それからあとの時間は持つて來た雜誌類や、トーマス・マンの「人と犬」を讀むとか晝寢をするとかに過ごして、四時半頃からは日の影川の岸の靑草が陰になるのを見計らつて又戸外に畫架を立てるのであつた。此方には下流から上流に向つて日の影川の兩岸を入れた。日を背負つて早く陰になる方の側には小高い所に七折村の公會堂と巡査駐在所と眞黑な酒　家とが入れられた。士折村の役場は私の畫架を立てゝ居る側の上の方に在る。役場や公會堂や信用組合は背洋館になつて居る。夕方の方の畫は生憎の夕立の爲めによく妨げ

られた。夕立の過ぎた後で無理に仕事をしたこともあるが、どうもそれは順調に運ばなかつた。其爲めに私の滯在は豫定よりも一日延びる樣になつた。

七折の役場に勤めて居る、足の悪いKと云ふ人がよく花などを持つては私を訪れた。役場から退けたあと、戸外で仕事する私を手傳つて、氣の毒にも其悪い足で畫の道具を運んで呉れたりした。此人は若山牧水に歌を見て貰つて居たことがあり、牧水の手紙を私に示したりした。もう今は滅多に歌も作らぬと云つて居た。牧水の郷里は東臼杵の東郷と云ふ所であると云ふ。

何しろ此處は横峰見立と云ふ二つの銅山を近處に持つても居るし、また兩村役場の所在地でもあり、高千穗遊覽の通路にも當つて居るので、自動車の往復は相當に在る。さうして其等が皆宿の前に留るので警笛と爆音で仲々騒々しい。私の居る八疊の室の、川でなく高千穗行の道路に面した方からは石の懸崖に凭せて造られた奥行の淺い二階の家並が見える。アイス・ケークと云ふ看板の出て居る其店の一つに細帶姿の女が入つて、其アイス・ケークを食べて居るのが見下ろされる。宿の女中の語る所によるとそれは日の影川に沿ろ

た山水樓と云ふ料理屋の酌婦で、而かも二三人居るうちの勝れた方だと云ふ。チンチクリンの彼女が勝れた方であるとすると、他は推して知る可きものだと思つた。

氷が拂底だと云ふので、氷水は賣つて居るが、ビールを冷やす可きカチ割を注文して其得られぬ日もあつた。

中村旅館は小ぢんまりした小さつぱりした旅館で掃除も屆いて居り、Aと云ふ女中もよくまめやかに働いて居た。延岡高女を出て隣りの郵便局に務めて居る娘さんも時折御給仕に出た。崖沿ひの家の常として、便所と風呂場とは地下室に當る階下に設けられて居た。便所の嗅ふことが大きな缺點であつたが、これは日本の大抵の旅館に通有して居るもので、此家ばかりを責められない。併し決していいものではない、便所の臭氣が家全體に擴がるから困る。

鮎は倦きる程毎回食膳に上つた。而かも仲々大きい立派なものである。それは刺身になつたり、汁の實になつたり、鹽燒に又フライになつた。日の影橋の橋欄に凭つて長い絲を垂れて魚を釣らうとして居るものがある。私の見て居る時それのかゝつたのは一度もなか

つた。子供達の一群は岩井川村へ渡る渡船のほとりで頻りに水を浴びて居た。それは實に愉快さうであつた。其れに比べると日の影川の方は上流の鑛山の影響で濁つて居る。

一日夕立の過ぎた後で綺麗な虹の二重にかゝるのを見た。それから又其晩の月夜が美しかつた。月は十二三日であつたらうか。雲と空との關係、晝間は見すぼらしい、私の晝中に入つた小屋――それは燒けた後の小學校の假校舍に充てられて居る――の屋根が微かに照らされて居る。盤光の點々する外は可なり暗いには暗い。併し其暗い色は單なる習套的の青黑ではなく、寧ろ赤味を帶びて居る。月夜の晝などは此頃の畫壇には殆ど見受けない。それはロマンチツクだらう。併し今日の我々でも自然からロマンチツクを感じる以上これを改めて畫にする可能性もあらうと考へた。私は急に手帳を出してほんのノートを取つたに過ぎないが、何時か月夜の景實現の時機もあるであらう。

吾妻小富士

吾妻小富士の畫を描いて呉れと云はれて、私は二科が開會すると間もなく福島へ來た。福島へは前に何度も來て居り、吾妻山の全容を眺めては居たが、小富士には注意しなかつた。

着いた日の午後辨天山の大原氏別莊に案内されて其くぬぎ林の外れから阿武隈川を隔てた吾妻山を望んだが、雲に掩はれて小富士の姿は見えなかつた。

高湯は亞硫酸瓦斯があつて畫を變色させる恐れがある、土湯へ行く途上によく見える所がある。城山（小鳥山）からも見えるなどゝ福島の師範校や女學校の畫の先生達から敎へられて、幸ひよく晴れた翌くる朝私は福島民報の中目氏や川俣から來た丸木氏などの案内で先づ小鳥山へ行つて見た。小さな射擊場になつて居る其丘の草原の外れから吾妻山は見えるが、どうも其前景が思はしくない、併し小富士の位置を見究みる必要から、私達は日のあたる其草原に立ちつくして雲の切れるのを待つて居た。さうすると暫くにして小富士があらはれた。其右の方のは一切經と云ふ山である。一切經も小富士も赤肌を露はして居る。其うしろに吾妻の尙高い嶺がある筈なのだが其處からは見えない。

小鳥山の眺めは吾妻の方よりも福島の方面が主になつて居る。鳥瞰亭と云ふ茶店からの眺瞰はパノラマ的ではあるが、仲々暢びやかな平和なものであつた。稻が今少し黄ばむ頃小鳥の網が張られる頃は尙美しくなるのであらう。私達は其處で辨當を使つてから土湯の方へ自動車を走らせた。

其途々にもいゝ前景はないかと氣をつけたのであるが、どうも思はしくない。とう〳〵土湯の少し手前まで來て漸く其處に一圖を定めた。うね〳〵の草山の上に小富士が載つて其うしろに一切經の一部が僅かに見えて居る。小富士は少し平べつたく見える嫌ひもあるが、兎に角嶄然と頭角をあらはして居るからいゝだらうと思つた。たゞ其處は土湯への街道で乘合の自動車などが屢ほこりを立てゝ通つた。山はもう何と云つても秋めいてきて居る。尾花の穗は赤く、草の葉の或ものは黄變して居る。

天氣は永續きしない。久しくぐづついたあとを漸く晴れたのが一日だけで、其翌くる日は曇りになつた。それでも無理に描きかけを續けて見たが、段々霧が多くなつて、どうにも仕樣がないことになつた。福島から通ふのを億劫に思つた私達は土湯の宿に二夜を過ど

したが、丁度晦日盆に出會つて、近鄕から寄つて來た若い衆達が荒川の畔のさゝやかな空地で踊るのを觀た。霧が小雨になつたのにもめげず、水音に競ふ櫓太鼓につれて踊り子の輪は次第に大きくなつたが、豫想よりも早く九時頃に止めてしまつた。矢張雨の所爲であつたらう。

冬の中禪寺

國立公園協會から賴まれて中禪寺湖を畫きに行つたのは昭和七年の暮おしつまつてゞあつた。今はケーブルカーが出來たから簡單に行けることになつたが、其時は自動車で登らねばならなかつた。而かも其自動車の行違ふことを避ける爲めに、往返の時間が定められて居り、從つて私は馬返しの茶屋にしばらく待合せなければならなかつた。

寒いなかを、而かもおしつまつて中禪寺へ登る物數奇も居らない筈である。だから湖畔

の宿はみな引上げて了ひ、戸が閉められてゐる、大阪屋だけは開いて居ると馬返しで聞いたから、私は其處に泊ることにした。それは中禪寺の入口の橋の袂にある家で、主人をはじめ家の人達が大變親切に私をもてなして呉れた。

地上に少し殘る雪を踏みながら私は其主人の案内で華嚴の瀧を見に行つた。エレヴエーターで瀧見の茶屋迄降りて見る、大瀑は水が減つて其ぐるりに垂氷が一ぱいさがつて居た。此頃でも投身者はあるかと訊いたらば、矢張相當にあると云ふ。併し冬は比較的少いのであらう。米屋云ふ旅館へ此前學校の遠足團體に加はつて泊つたことがあるが、どうも其時のと位置が違つて居ると思つたら、それは心中ものを泊めてそれの放けた火によつて燒かれたのであると云ふ。つまりそれも冬のことであつて、心中の男女は瀧のそば迄行つた所が、あまりに寒さうなので投身を止め、宿屋の室に火を放つて燒死したのであると云ふ。其御蔭で全燒した米屋はえらい迷惑を受けたものである。

歌ヶ濱立木の觀音のあたりも隨分樣子が變つて、而かも惡くなつた。第一觀音の朱塗の樓門のこまつしやくれたのはひどく嫌であつた。大きくある可き樣式の建物を小さいスケ

ールで建てたからそれは玩具じみて見えるのであつた。私は朝觀音の傍の湖畔に畫架を立てゝ足尾方面の山を主眼とした一圖を作つた。それは珍らしく穩かな日であつたので、山の姿はそつくり湖面に映つた。枯草の山の襞を成す陰には雪が在つて、それが美しい青色をして居た。左手の最も近い山は全く陰になつて、それは枯木に覆はれて居た。寒からうと思つて宿からついて來た男が私の傍で火を焚いて呉れたのはよいが、藁灰が畫の方へ飛んで來るのには困つた。

中禪寺の冬は風が名物となつて居るさうだが、幸ひに私の滯在中は穩かな日が三日もあつたので、都合よく午前午後二枚の畫を仕上げること が出來た。諏訪湖の水が凍るのだから中禪寺湖も凍ならねばらぬ筈であるが、それが滅多に凍らぬのは風の强いためであると云ふ。

或朝立木觀音のそばの畫を續けて居る時、忽ち足尾方面の山に雲がかゝるのを不思議に思つて餘儀なく筆を擱いたが、それは雲ではなく、足尾銅山の烟が南風の爲めにこちらへ吹きつけられたのであることを後で知つた。

あまり暖か過ぎると思つて居ると、其あとが雪になつた。朝起きてこれは大變だと思つたが、併しそゝ程澤山は降らなかつた。小止みになつた時宿のゴム靴を借りて橋を渡りレイキサイド・ホテルや米屋旅館を通り過ぎたあと、とある道ばたの茶店の軒下のやうな所で、私は湖畔の雪を小品に描いた。それは大して寒くもなかつた。樹々の小枝の一々に今積つたばかりの雪を寫すのはさう樂な仕事でもなかつた。私は前景の樹の枝に積つた雪を空に對して可なり暗く描いた。

さうして雪の降つた翌くる朝は快晴になつたが、今度は强い風になつた。その中を無理に仕事しようとしたが、畫架の倒れぬだけの防ぎはつくにしても、畫布其ものが風をはらむので如何ともすることが出來なかつた。午后の方の畫はレイキサイド・ホテルの近くで男體山の裾と中宮祠の方とを入れたものであつた。前景には何と云ふ名か枝のひねくれた枯木を二本入れた。

强風を防ぐ爲めに冬季此邊の家々は皆其前に高い葭簀圍ひをするので、それが眺望を妨げることになる。從つて宿の緣側から瞰下した景色を描くと云ふやうな都合のいゝ譯には

行かない。

帰途私は、はじめて日光町の小西に泊つて見た。さうして大谷川や稻荷川のほとりになほ畫材を探つた。小西なども御客が少くがらんとして居た。日光でも中禪寺でゝ私は鬼怒川溫泉に客を取られる一云ふ苦情をよく聞かされた。鬼怒川は眞面目な人の行く處でないと云ふ樣な悪評をも聞くのであつた。

小西の女中はなほ私に告ぐるに、曾て其處へ泊つた姉弟の不倫な心中沙汰を以てした。遊廓の者だとかで、其姉は出戻りであつたと云ふ。便所へ行く間すら孤りで居れなかつたと云ふやうな、それは全く變態の關係に陷つて居た。二人して華嚴に向つたのを、怪しいと睨んで其筋に知らせたから、引戻されたと云ふことである。

湯の湖

私は三年ばかり前、久しぶりで湯の湖へ行つた。其夏は畫の方よりも著述の仕事をかゝへて涼しい所を彼方此方した譯である。水戸の大洗に數日を滯留し又中禪寺湖畔の宿にも幾日を費した。それは支那事變がはじまつて間もなく、出征の兵が盛んに送り出される頃であつたから避暑の客も遠慮してか比較的少く、仕事をする私にとつては都合がよかつた。

中禪寺の宿は橋の袂の寧ろ大衆的なもので、泊りの客よりも中食客に混雜するやうな家であつたが、そのすぐ前が湖水巡りの船の發著所になつてゐるので乘船を勸める女の聲が僅かの時間を置いてはうるさく聞えるのであつた。それと今一つ私の氣になつたのは、二階の欄干からの折角のいゝ眺めが、發著所の殺風景な建物と、遠慮もなしにのさばる電柱電線との爲めに害されてゐることであつた。それでも朝早くは、橋を渡つて歌ヶ濱の方へ

行く路から、外國大使館の別莊をもつ岸の突出しを經て足尾方面の山々を望む景色が堪らなく美しかつたり、又、道路に沿はない、それと直角をなす方の二階の廊下から、其の頂きが雲に蔽はれた男體山の裾を葉落松の垂直線が切つてゐる、日本畫風の趣がよかつたりするので、充分私を慰めるものはあつた。

宿の主人の案内で華嚴の瀧を見にも行つたが、私には其近くの、これも中禪寺湖の水が漏れるのだといふ白雲の瀧を美しいと思つた。石の間を屈曲して落ちて來る水の勢のすさまじさは爽快を極めてゐる。私は縱畫の日本畫になると思ひ一寸圖を取つて來て、その後これを尺五に描いて見たが、相當な大きさの油畫にもなるであらう。

湯の湖へはたゞ一日行つたゞけで滯在した譯ではない。その途中、龍頭の瀧へ寄つて、こゝでも即寫をしたが、これも日本畫ものである。こゝも茶店から畫けるので足場は惡くない。

バスで戰場ヶ原を過ぎつて湯元へ入つたが、明治四十一年の夏以來だから、その後燒けてもゐるし、殆ど昔の面影は無い。私は南間ホテルの三階から湖水を眺める一圖を畫いた

が、それは兎島の半島と湯瀧の落ち口との方を望んだものである。前景の蘆生ひのあたりも埋立てられたらしく、湖面に湯の煙りの這ふことは昔のまゝであるにしても全く樣子は變つてゐる。

前に來た四十一年の夏は一週間ゐたか十日もゐたか今記憶が確かでないが、その時は板屋といふ宿の客となつた。私は新館の方にゐたのであるが、道路を隔てた舊館は非常に雅味のある建物であつた。街路に面した廊下の欄干の具合などに異色があつたと思ふが、この方には專ら自炊の湯治客が泊つてゐた。板屋は内湯もあつたが、外の共同湯に白濁の硫黄泉があつて、私はそれにも入つたことがある。湯治客は柄杓　手拭とを手にして宿と湯との間を往來してゐた。そんな古風な趣を今は全く見られなくなつた。

私はその時湯治よりも油畫を描くことを本務としてゐた。私は湯瀧の瀧壺に遠くない處から樹木の間に男體山を望む四十號大のものを畫いたのだが、天氣が思はしくなかつたり、又ぶゆの大軍に責められたりして仕事はかなり苦しかつた。畫は瀧見の茶屋に預けて置き、又そこでぶゆを防ぐべく頭に被る火事頭巾を借りたりした。パレットを持つてゐる

方の私の手の甲はひどくはれ上つた。油繪具を拭いた巾に火をつけて間近く燻べもしたが、今度はそのいやな臭ひにこちらが辟易した。

この畫はさういふ苦心を經たり、また屋つた人夫と二人して雨の中を日光の町まで持つて降りたりしたのであるが、その年の第二回文展に此方は落選し、それよりも輕い氣持ちでサラリと畫き上げた十二號の別の一枚「火の跡」と題するものが入選した。私はその時ひどく不平であつて、もう文展には出すまいとさへ思つたものである。「火の跡」は湯元へ入る途中の右側の山に、山火の跡に立ち枯れになつた樹幹の白く亂立するのへ雲の峰を添えたものであつたが、この間行つた時いくら氣をつけても、それがどの邊であつたか全く見當がつかなかつた。其時熊笹の原であつた處に植林されたものが三十餘年を經ては一ばしの林になつてゐやうから、それは無理のないことである。

昔の滯在の時は暇もあつて、假令金精峠から菅沼丸沼の方へ足を延さなかつたにしても三嶽と溫泉嶽との間の細路を通つて、　りの下に小さな蓼の湖を見ながら、人つ子一人通らぬ淋しい山路を刈込湖まで行つて見た。併し苦勞して行つた割に畫の方からは格別面白

い處とも思へなかつた。私は湖畔の土や草の上に、鐵砲だまのやうな糞のかたまつ澤山あるのを何かと思つたが、あとで聞くところによるとそれは鮎の糞だといふことであつた。（昭和一三、一〇）

美保の關

朝眼が覺めたのは六時ごろであつた、雨になりはしないかと心配してゐたので、すぐに緣側の硝子戸に引かれたカーテンを開けると案の定空は曇つてゐたが、それでも急に降り出しさうにも見えない。

どんよりした宍道湖の朝もなかなか悪くないので、私は朝飯前に一枚の水繪を描いた。今度は臨水の客となつたが、二た昔前の夏來た時は、これよりももつと大橋の方へ寄つた岩田屋の支店に泊つて、その二階から眺める湖の朝夕をたまらなく美しいと思つたものである。Sといふ富豪の家のあつたあたりの土藏が水に臨んで立つてゐるのは殆ど元のまゝであるが、そのSも盡くことをやめて今は政界の人となつてゐる。それから少し先きに見える突出た處に紅白の吹流しが靡へるのを何かと訊いたら、若槻男の銅像が建てられるその式場ではないかといふものがあつ。しかし私はその眞僞を知らない。その除幕式のために銅像の原型作者たる藤川勇造君が今日午過ぎに着くといふことであるが、間もなく美保關へ行く私は行違つて逢へないことを惜んだ。

向ふに列る山々は大原郡仁多郡の方面にあたると思ふ、それは、春なほ寒く靑みがゝつたいゝ鼠色に落着いてゐる。着いた日の朝私は稻田神社に詣でるために、往返五時間も自動車に乘つてその仁多郡の横田へ行つた。簸川上の傳說にある稻田姫を祀る小さな祠があつたのを、その地方出身の小林氏が自ら費を投じて近頃より大きく改築したものである。

松の少しばかり生へた嫁ケ島を過ぎて烏が二羽三羽飛び違ふ。湖水の淺いところは赤い土が透けて見えてをり、杭の短いのがところどころに首を出してゐる。私の畫には無論入れなかつたが、右の方に突出た殺風景な埋立は最近のものであるらしい。樹でも植ゑられ

たら多少違ふだらうがその硬い直線が靜かな湖畔をひどく妨げてゐる。

御城山に行つたり湖邊を逍遙したりする暇を持たずに、私は自動車で美保關へ行つた。前には汽船で中の湖を渡つたのであるが、今度は時間を惜むために車にした。本庄から先きの海岸を傳ふその自動車路の眺めは船からするよりも却つて趣があつた。大根島の長い廣がり、岸邊に近い辨慶島なども面白い。

最も細い海峽を挾んで境港に對する森山の少し先きに道路工事のため車止めになつてゐる箇所があり、私達もそこでハイヤを見棄てて關から折返す定期のバスに乘換へを餘儀なくされた。そこには今崩されつゝある崖からの石や土が堆くなつて、歩いてさへ通ることが出來ぬやうになつてゐる。私達は下の畑を歩いて、待つてくれたそのバスに漸く追つくことが出來た。バスは滿員で私達の荷物を置く餘裕もないのであつたが、同乘の警官が好意で荷物の一つを膝にしてくれたのは有難かつた。

道路は單なる補修でなしに幅員を增やすのであるから手輕いものではなかつた。車はなほ幾度かトロの軌道を越えたり積まれた石を避けたりして危い目をした、或時は助手が路

に降りて障碍の樹の枝や竹を取除きもした。

車で來る途中も案外はつきり見えてゐた伯耆大山は、關に着くと一層大きく眺められた。私は美保館の二階から小灣の東の端と併せて大山の姿を畫いた。曇つてゐるにも拘らず山の輪廓がはつきりしてゐるのは雨の前兆であると、經驗によつて知つてゐる私は、心配しながら描いてゐたが、それは筆を擱くころまで姿を見せてゐた。

天氣によつて形が變る、大さが變ると關の助役もいはれたが、實際さういふ感じがあるかも知れぬ。私は山の頂に殘る雪の形を注意した。山の端から突出た、燈籠を載せた埠頭の尖をそのまゝに寫す私を見て、市長と助役とは笑ひながら、それは水害で壞れたまゝになつてゐるのです、しかしこれも記念になつていゝかも知れぬといふ。

硝子越しだから仕事が出來た樣なものゝかなりに吹いてゐる東風の强さは沖に立つ白浪にも窺はれた。しかし灣内はさすがに靜かで、たゞ幾條の線が、常は美しかるべき濃綠の倒映を亂すのみであつた。

色の港として名高い美保の關も今は泊り客がなくて旅館は寂しくなつてゐるといふ。交

通が開けると何處もさういふ運命になるらしい。しかしこの小ぢんまりした灣頭の風景を味はひ美保神社に詣でる遊覽の客を減じてはゐまい。

峽谷に關して先づ思ひ出すのは先年高島北海翁から長門峽の美を說かれたことである。それはたしか或年の春熱海の露木に泊つた時別館に居た翁から其寫眞などを示されたのであつたと記憶する。翁は其峽谷に道路を開く資金を集める爲めに畫會を企てたりして、其鄕里の勝地を世間に廣めることに可なりの力を致したやうである。其時翁に對して私が長門峽の石の色を問うたことは少からず翁を悅ばせた。石の色を訊いて下さるのは嬉しい、日本畫家などは大抵さう云ふ質問をされることがないので實に張合がないと云はれた。

私の知る峽谷

名も高い紀州の瀞八丁と云ふものも私はまだ知らずにゐる。大正二年の夏、新宮に滯在してゐる間に其市の少し上まで熊野川を舟で遡つたことはあるが、交通の十分に拓けなかつた其頃としては、瀞まで行くことが可なり臍劫に思はれたのである。陸を歩いて行くか舟でのろ〳〵遡るより外方法が無かつたからである。西村伊作君の弟の大石眞子君によつてプロペラー船が企てられたのはそれから間もなくの事であつたが、併し眞子君のは物にならず其あとから別人によつて創められた方のが成功して今迄續いてゐるさうである。

瀞を最も早く畫にしたのは中川八郎であつたと覺えてゐる。舟にゐて見る濃青の水のずつと下に尖つた岩の頂が透けると云ふやうなことを私は中川から聞いた。

同じ瀞でも秩父の長瀞は紀州のものと比べものになるまい。しかもそれは極めて短い間の景趣に過ぎない。私は長瀞へは學校の生徒や畫の門人などをつれて幾度か行つてゐるが、それは鮎の季節ではなしにいつも秋であつた。長瀞はその靑く澱む潭も見どころには違ひないが、それに沿うて廣い面積を占める雲母岩の列なりがむしろ特色をなしてゐる。雲母岩の横の線の重疊、それに私は興味をもつてゐる。私はまだ荒川を三峰の方まで遡つたことはないが、長瀞を下つた波久禮には畫架を立てたことがある。この邊の秋はかなり

に美しい。

山岳黨でない私はまた峽谷探險の趣味をもつてゐない。從つてまだ黑部峽谷の如何なるものであるかを知らない、水電工事のためにその峽谷美の破壞されつゝあることが、今私の關係してゐる風景協會の論題の一つとなつてゐるのを聽いてゐるくらゐなことである。

それからこれは大分ポピュラーなものであるが、私はまだ天龍下りなるものを經驗したことがない。飯田に知れる醫師があつてそれを訪ねたが一度天龍を下つて見ようと思ひながら、ついそれを果さずにゐる。木曾も寢覺のあたりは中央線の車窓から見下ろしたに過ぎず、たゞ所謂日本ラインはその可兒合といふあたりから犬山城下までを降つたことがある。こゝでは彼怪岩の起伏する間に舟をつないで畫を描いたこともある。崖を降りて猿が岸邊をうろついてゐる姿を同行の人は指したが、眼の惡い私には容易にそれが發見されなかつた。

犬山の鐵橋の袂なる石崖の上に別莊を建てた人がある、それは殆ど使用されなかつたと聞くが、かういふ眼につく所に別莊を營む人は、有力な建築家に謀つて好趣味のものを建

てないと、あとで物笑ひになり風景の邪魔になることをよく〳〵心すべきである。一方犬山城は實によく地點が選ばれてをり、それが風景を統御することに役立つてゐる。

最近犬山、猿渡りといふやうな地名を利用して桃太郎の鬼ヶ島退治の舊蹟といふやうにこじつけ、桃太郎屋敷とか婆の洗濯石といふものまで設けて、これを小學生が遠足の目的地とするに至つてはあまりに人を馬鹿にしたものである。これには電車會社も關係してゐたかと思ふが、宣傳もこゝまで度を過ごすと困つたものになる。

長野を過ぎてその市の後を流れる裾花川を畫にしながら、人の賞める裾花峽に入らうとはしなかつた。尤もそれは私の旅の慌しさのためでもある。

畫の方の見地からする時峽谷は必しもわれ〳〵の喜ぶ所とならない。それはなぜかといふに、構圖上大抵空が入らなくなり、またたとひ入つたにしても極めて小さくしか入らなくなるので、行詰つた感じのものになることが多いからである。峽谷の奥深い幽邃な感じそのものは私達でも賞美するのであるが、造形美術の題材として見る場合は、また別な考へをもつてこれに對するのも止むを得ない。

徳島の阿波吉野川の上流大歩危小歩危の峡谷を太平洋畫會の諸友と見舞つたのもすでに十八年ほどの昔になる。それは春櫻の咲く頃であつた。川沿ひにみつまたの黄色い花も咲いてゐた、夏はどんな風であらうか、高知へ抜けるあの川沿ひの街も今は定めし道のよくなつてゐる事であらう、その頃は池田町までしか通じてゐなかつた鐵道もたしかその先きへ延びてゐる筈だ。

九州の延岡から廻る五ケ瀬川峡谷のことはすでに外へ記したから重ねて述べることを避けるが、高千穗峡の奇勝は日本畫になるにしても洋畫にしにくいものであらう。

耶馬溪もその名ほどの事はないが、奥へ行くよりも却つて青の洞門などのある、その入口が畫材になる。私はあの競秀峰を秋と冬とに二度描いたことがある。溪耶馬といふ方へ入つて見ても私はあまり酬はれるところがなかつた。尤も私のは高みに登つたりする勞を取らずに、たゞ尋常の路を踏むだけのことしかしないのである。

朝鮮の金剛山を何となく親しめないやうに小杉放菴君はいつてゐたが、二度其處に遊んだ私はそれをさう悪いとは思はない。しかし私は二度とも山つゝじが盛りを過ぎた初夏に

行つたので、秋がどんなに美しいかを知らない。金剛山には石山と溪谷と寺觀とこの三者が相伴つてゐるので、その興味は決して單調でないと思つてゐる、この點において耶馬溪などはその足もとに及ばぬ筈である。

溫井里から萬物相を右にして溫井嶺に至る寒霞溪、また玉流洞、九龍淵、それから内金剛には萬瀑洞とかう三つの溪谷が皆それ〴〵の美をもつてゐる。萬瀑洞を摩訶衍まで登つた時その途すがら大山蓮華の白い大きな花を見るのも嬉しかつた。

青澱む水の潭と飛瀑とが交互する形式は内地にもないとはないが、金剛山溪谷がその最代表的なものであらう。水の多寡によつて趣は變るであらうが、一枚岩の傾斜を水が傳ふ飛鳳瀑、九龍瀑などよりも、垂直の斷崖をやゝ離れて水の落ちる華嚴、裏見式の方が涼味において優るやうである。大正七年にはじめて行つた時は溫井嶺から長安寺までの暑い山麓を歩かねばならなかつたが、今は交通が拓けて、電車、自動車の便もあり毘盧峰越えによつて内外金剛の近い連絡も出來るやうになつた。山中の寺々が日本の諸寺に比べて畫的な外觀を具へてゐることもまた私達を悦ばすに足りる。

阿波吉野川

船で高知へ行つた私達は其處を去るのを北山越しにした。南國は十一月の末にしては流石に暖かつたが、其日は時雨もよひに曇つて居た。

私達は一の宮で一寸車を降りて土佐神社に詣でた。兩側に杉の列ぶ參道の奥にある其社は素朴で寂びのあるいゝ感じのものであつた。祭神は一言主の神で現在の建物は元亀元年長曾我部元親の再建したものであると云ふ。元親が凱旋の儀式を行つたと云ふ其拜殿は特殊なプランをなして居る。本殿の正面の柱を魚が貫いて居るのはどう云ふ意味かしらぬが奇拔なものであると思つた。庶民松明を焚いて神輿の御供をする八月二十五日の志奈禰祭はかなり盛んなものであると、案内のN氏Y氏等が云つた。

道路から樓門をくゞらうとする手前に近頃出來たらしい朱塗の橋があるが、これはひど

いぶちこはしであると皆して言ひ合つたことである。

路は間もなく山にかゝつて峠を越すと繁藤と云ふ所へ出るが、それからは吉野川へ注ぐ支流に沿ふて下つて行くことになる。其途中杉と云ふ地名に出會ふが、それは其處に巨大な杉の樹があるからである。路から遠くもない高みにあるのだが、私達は其處へ行くことを止めてたゞそれを車の中から仰いだ。

穴内川と今一つの川とが合流して吉野川となる所から少し下ると大田口の宿になる。土讃鐵道は高知から此大田口迄が通じて居たのを、最近大田口池田間が開通したので徳島からも高知からも陸路を直通することになつた。私達は其開通の六日ばかり前に高知を流つたのである。

高知を出るのがあまり早くない上に土佐神社に手間取つて其處を辭したのが十一時にもなつた。小雨も降つて來たりするし、私達は途次の寫景を思ひ止り、大田口の或家で午食を取ることにした。

丁度打ちたての猪があると云ふのでこれ幸ひと猪鍋にした。それは子猪であるさうで、